

四五二

宮廷の道化者は何人の爲めに必要であるか。——非常に美しい人や、非常に善良な人や、非常に有力な人等は、殆んど常に何物に關しても、完全な赤裸々の眞實を聞くことが無い。蓋し彼等の面前では、我々が知らず識らず少しばかり嘘を云ふ。何故ならば我々は彼等の影響を感得し、その影響を考へて、眞實を順應した形に於て述べ傳へる（即ち、事實の色調や度合を誤魔化したり細目を省いたり附け加へたり、そして全然順應を許さない様なものは言はずにしまつたりして）傳へるからである。だが、かうした種類の人々もほんとうに眞實を聞かうとするならば、彼等は彼等の「宮廷の道化者」を召し抱へて居なければならぬ——手加減をなし得ないと云ふ狂人の特權を有つた人物を。

四五三

氣短か。——そこには行爲の、並びに思想の人々に於て、或る程度の氣短かがある。それは或る失敗の場合、彼等をして直ちに反對の領土へ蹈込ませ、そこに興味を集中させ、新らしき企に没頭させる——そこでも亦再び、成功のはかばかしからぬことが彼等を逐ひ立てるまで。かくて彼等は無鐵砲

な冒險者等の如く、多くの領土と自然との實習を通じて彷徨ひ歩く。そして遂に、彼等の大なる漂泊と練習とが残したる、人間や事物に對する博識に依つて、また彼等の衝動のいくらかの緩和に依つて、有力なる實行家になり得る。乃ち正確の上の欠陥が、天才の學校になるのである。

四五四

道德的空位。——誰が今、他日道德的感情及び批判を置き換へるべきものを、記述し得たであらう！——此等の物が全然誤謬の上に土臺を置いてゐるといふこと、その建造物が修復され得ないものだといふことなどは、我々にまで如何に確實に洞見されてゐようとも、それらの物の束縛は一日一日と減退して行かねばならぬ——ただ理性の束縛だけが減退して行かない限りに於て！ 生活と行爲との法則を新しく立すると云ふ、此仕事に對しては、今日の生理學や、醫學や、社交及び孤獨の學問などもまだまだ十分でない。ただそれらの物から新しき理想に對する礎石（新しい理想その物でないまでも）が取られるにすぎない。かくの如く我々は、我々の趣味や天分に從つて、先驅的生存もしくは追尾的生存を營む。そして此の如き空位に於て我々の爲し得る最善は、出來得る限り我々自らの追ひたること、及び小さな試驗的國家を建設して見ることである。我々は實驗である——我々にしてそれ

でありたいならば！

四五四

臨路へそれて。——此書物のやうな書物は、通讀されたり朗讀されたりすべきものでなくむしろ讀さるべきものである——とり分け散策のとき、旅行のときなどに。人は頭を一寸突き出して、直ぐに引込めることが出来なければならぬ。そして何等の通常なものをも周圍に見出してはならぬ。

四五五

第一の天性。——我々が今教育される如く、我々は先づ第二の天性を獲得する。そして世間が我々を熟してゐるとか、成年に達してゐるとか、役に立つとか云つてくれるとき、我々はそれを有つてゐるのである。ある少數の人々は、他日此皮を脱却すべく十分に蛇である。さて其時彼等の包被の下に彼等の第一の天性が熟してゐるのである。けれども多數の人々にあつては、その萌芽が枯れ凋んでしまふ。

四五六

出來上りつつある徳。——徳と幸福との一致をとく古代哲學のその如き、或は『先づ神の國を求めよ。さらばかくの如き凡べての物は汝等に來るべし』といふ基督教のその如き主張や約束は、決して完全なる正直を以て爲されたことはないが、尙ほ且つ惡しき良心なしに爲された。人々は、彼等が眞實であることを願つたところの命題を、外觀の反對なるにかかはらず、眞實として大膽に押し立てた。そして其場合、宗教的もしくは道徳的な良心の苛責を経験しなかつた。なぜと云つて彼等は、徳もしくは神の *in honorem majorem* で以て現實を超越したのであり、又何等の利己的な意志なしにであつたから！ 眞實さの斯うした階段に、今尙ほ多くの天晴れた人々が立つてゐる。彼等が私なしに自らを感じる時、眞實をより輕々に取扱ふことが許されたもののやうに彼等に見えるのだ。だが、ソクラテスの徳の中にも、基督教の徳の中にも、まだまだ正直が見出されないことを注意せよ。正直は最近の徳の一で、まだあまり熟しないで、まだ往々にして取り違へられて、誤解されて、それ自らをまだ殆んど意識しないのである。我々の心意次第で、我々が促進したり、阻止したりすることの出来るやうな、出來上りつつあるところの事物である。

四五七

最終の寡言。——或る人々は寶物の發掘者に似てゐる。彼等は偶然、他人の魂の用心ぶかく藏されたる事物を發見する。そして抱持するのが往々困難であるやうな知識をもつやうになる。我々はある事情の下に生者と死者とを或る度合まで善く知り、內的に追跡し出すことが出来る——彼等に就いて他の人に話すのが辛らくなるほどに。我々は一語毎に無分別になりはしないかと恐れてゐる。私は最も賢き歴史家の突然の沈黙を想像することが出来た。

四五八

大なる儲物。——それは或る甚だ希有な物、しかし乍ら狂喜すべきほどの事物である。即ち、立派に造られた理智——性格や、嗜好や、かかる理智の屬するやうな經驗をも有つた——のある人間の事なのだ。

四五九

思想家の宏量。——ルッソオやシ・オベンハウエルは二人とも、彼等の生存に *vitam impendere vero* と云ふ格言を銘記すべく十分に自尊的であつた。そして二人は又彼等が *verum impendere vitae* に成功しさうになかつたとき、其自尊に於て如何に苦まねばならなかつたかよ！——*verum* は、彼等の何れもが理解したやうに——メロデイイに合ひさうにない下手なバスのやうに、彼等の生活がその知識と並び進んだとき！しかし乍ら知識は各の思想家にまで、それが丁度彼の體にからだ順應したのに標準を置いてばかり測定されるとき、あまり合せなものでない！そして思想家等も、彼等の虛榮心が唯だ堪へられるに止まるほど大きなものであつたとき、あまり好都合に行つてゐない！丁度其點にこそ、大なる思想家の最も美しき徳なる宏量が輝く。彼は認識者として自分自身と彼の生活とを、勇敢に、往々鐵面皮に、往々崇高なる嘲笑で、そして微笑し乍ら犠牲にするのである。

四六〇

我々の危険な時間を利用する。——我々は一人の人間や一の情態を全然別様に知ることを學ぶであらう——財産や、名譽や、生死に關する危険が、我々及び我々の最も愛する者にとつて、各の其運動の中に横つてゐるときには。例へばテイベリウスは皇帝アウグストゥスの内心について、又彼の政治に

ついでより深く考察し、それについてより多くを知得したに相違ない——最も賢明なる歴史家に可能であつたより以上にすらも。今日我々は皆比較的、我々が好きな人間通になり得べく、遙かに大きすぎる安全の中に生活してゐる。ある人は道樂から、又ある人は退屈から、第三者は習慣から認識する。決して、『認識せよ、しからざれば滅亡せよ!』と云ふやうなわけでない。眞實が其小刀を以て我々の肉へ切り込んで來ない限り、我々はそれに對する輕視の内密の留保を衷心にもつ。それは我々にまでやつぱし『翼のある夢』にあまりに似過ぎてゐるやうに見える——あだかも我々がそれを有したり有しなかつたりすることを得たかの如く。あだかもそれに於ける或る物は我々の任意であつたかの如く、あだかも我々が斯うした我々の眞實からも目覺まされ得たかの如く!

四六一

Hic Rhodus, hic salta. — 我々の音樂は、總てのものに變化し得べく、また變化しなければならぬ。何故ならばそれは海の惡鬼の如くそれ自身の如何なる性格をも有つてゐないから。此音樂は從前基督教の學者等へ注意を向けた。そしてその理想を音響に翻譯することが出來た。それは結局また、理想的な思想家に適應するやうな、あのより晴れやかな、より喜ばしき、普遍的な音響を何故に見出し得

なかつたか? — 彼の魂の廣々とした、揺れ動く圓天井の内におみ安らかに浮沈し得た一の音樂は? 我々の音樂はこれ迄、そんなにも偉大であり、そんなにも善良であつた。それにあつては、いかなる事物も不可能でなかつた! さればそれが證明せよかし——崇高と、深く暖かな光と、最高の合理性の悦びとを、この三のものを一度に感得するのが可能であると云ふことを!

四六二

徐々の治療。——魂の慢性的疾患は體からだのそれと同様に、減多に體や魂の理性に對する格段な侵犯に依つて起らず、むしろ通例は無數の氣附かれない小さな怠慢に依つて起るのである。例へば、毎日わづか宛呼吸を弱くして行き、そして餘りにわづかなる空氣を肺臓に取り入れる結果として、その肺臓が十分に働らかされず、實習させられないやうになるところの人は、結局慢性的肺患に罹るであらう。かくの如き場合にあつては、治療は何等の他の方法をも要しない。ただ再び數知れぬ小さな反對の實習をやらせ、氣附かれない様に他の習慣をうつしてやると云ふこと。例へば毎時間十五分宛強く且つ深く呼吸する(出來るならば地上に寢そべり乍ら。十五分毎に鳴り響くところの一の時計がその場合彼の伴侶として選ばれねばならぬ)のを規則にする等である。總て此等の治療は悠長で下らない。け

れ共その魂を癒さうと思ふものは、最も下らない習慣の變化について考量するであらう。多くの人々は一日に十回位、その周囲に對して意地悪く冷い言葉を發する。そしてそれについて自ら多くを考へない。取り分け、數年の後彼が毎日十回位その周囲を不機嫌にすべく餘儀なくされる様な、一の習慣の法則を彼が自分自身の上に作つたであらうことなど考へても見ない。

四六三

七〇〇目に。——『汝等は、あれを私の創造として賞讃するののか？ 私は只私に迄お荷物であつたところのものを放擲したに過ぎない！ 私の魂は創造者の虚榮心を超越してゐる。汝等は、これを私のあきらめとして賞讃するか？ 私は只私に迄お荷物であつたところのものを放擲したに過ぎない！ 私の魂はあきらめた人の虚榮心を超越してゐる。』

四六四

施與するもの羞恥。——常に施すもの與へるものの地位に居り、そしてさらし乍ら顔を見せると云ふのは、餘りに腹の綺麗なものの仕方でない！ 然し乍ら施したり與へたりし乍ら、同時にその名

とその恩寵とを包み隠すのは！ 或は自然の如く、何等の名前をも有たないのは！ 自然に於ては此事實が、他の何よりも我々に元氣附ける。ここでは遂に、最早や與へるもの施すものに、最早や『慈悲深き顔』に會はない！ 勿論汝等はかく元氣附けられることを臺なしにしてしまふ。何故と云つて汝等は一人の神様を此自然の中に置いたから。そして今再び總てのものが不自由であり困苦してゐる！ 如何に！ 我々はいつも只だ自分自身とのみ居てはいけないか？ いつも見守られずに、警戒されずに、護衛されずに、施與されずに居てはならないか？ 若しも常に誰かが我々の周囲にあるならば、勇氣と溫情の最も善きものは、此世界に於て不可能なものにされるであらう。我々は天のかうした厚かましさを前にしては、かうした避け難き超自然的な隣人を前にしては、全く悪魔になり度くなかつたか？ だがそれは必要でない。それはげに只だ一の夢に過ぎなかつた！ 我等をして目覺めしめよ！

四六五

會合のとき。——A。汝は何を見てゐるか？ 汝はもう随分長くここにちつと立つてゐた——B。絶えず古きものと新らしきものとを！ 一の事柄の覺束なさが甚だ遠く且甚だ深くその中へ私を飛び

込ましたので、私は遂にその奥底へ這入り、そしてそれが餘りに多くを値してゐないことを洞察する。總ての斯様な経験の終りには、一種の悲哀と無感覺とが立つてゐる。私は毎日三度も小規模に之を経験する。

四六六

名聲の損失。——未知の人間として人間にまで語り得べく、如何なる便宜であるかよ！ 人々が我から無名を剥ぎ取り、我々を有名にするとき、神々は我々から『我々の徳の半ば』を取り去る。

四六七

二重に辛抱強く！——『かうして汝は多くの人々を苦しめる。私はそれを知つてゐる。そしてまた、私があるために二重に苦しまねばならぬことを知つてゐる。第一には彼等の苦しみに對する同情によつて、第二には彼等が私に對して爲すであらう復讐によつて。しかし乍ら、それにも拘らず、私がする様にすると云ふのは、依然として必要なことである。』

四六八

美の國はより大きい。——我々は總ての固有なる美を發見する爲め、謂はば現行犯を押へる爲めに、狡猾に且快活に、自然の中をぶらつきまはる。我々は或は日光の中に、或は悪い天氣の下に、或は最も蒼白なる薄明の中に、岩や入江や橄欖や松の木等を持つたあの海岸を、申分なく立派なものとして見渡たさうと云ふ試みをする。かくの如く我々はまた、人間の發見者探検者として、善惡を彼等に證明しつつ、彼等の間を歩き廻らねばならなかつた——或る者にあつては日當りよく、第二のものにあつては天氣悪しく、第三のものにあつては只だ薄明か雨天に於てのみ見られる様な、彼等に特有なる美を現はし示すことの爲め。さらば邪なる人間を、彼の固有の大膽なる線條と光色の効果とを有する亂暴な風景の如く享樂すべく、我々は禁じられてゐるか？——その人間が善良に且つ合法的に行動する限り、我々の目に畫き損ひが戲畫の如く見え、自然の中の一汚點として我々を惱ますときに。然り、それは禁じられてゐる。これ迄我々は只だ、道德的に善なるものの中に美を求めるところのみ許されてゐた。そしてこれが十分な理由である——我々が左様にわづかを見出し、且つ骨格の無い想像的の美を左様に多くさがし求めねばならなかつたと云ふこと！ 有徳なる人々の聊かも夢想しない

様な、幸福のさまざまな種類が邪な人々の場合に珍らしくない如く、彼等にはさまざまな種類の美もあるのである。そして多くのものがまだ発見されないでゐる。

四六九

賢人の非人情——佛教徒の歌に従つて云へば、『犀のごとく寂しく彷徨する』ところの賢人の、重苦しき搗き碎くやうな進路は、折々慰藉的な柔化された人情の徴證を要する。そして唯だにかのより速き歩調や、かの慇懃な社交的な才氣のそれだけでなく、ただにキツトや或る自己嘲笑のそれだけでなく、更に又矛盾のそれや、勢力ある不條理への時あつての回歸のそれをすらも要する。彼が、運命の如く回轉する轉子に似ないことの爲め、彼は——教へんとする彼は、彼の缺陷をその修飾にまで使用せねばならぬ。そして『我を輕蔑せよ！』と言ひ乍ら、彼は矯慢なる眞實の代辯者たることの許しを乞ひ求める。彼は汝等を山の中へ導かうとする。彼は恐らく汝等の生命を危ふくするであらう。これに對して彼は、汝等が前にか後にか、斯うした案内に復讐することをよろこんで承認する。それは、彼が先行の享樂を自らなしたのに對する價なのである。汝等は、彼が曾つて薄暗き洞を通して、嶮しき道に汝等を導いたとき、如何なる考が汝等の心に泛んだかを覚えてゐるか？ 如何に汝等の心臓が、

鼓動を高めつつ、不機嫌に自らへ言つたかよ、『此案内者は、こゝに匍行するよりも、何かより善き事を爲し得たであらう！ 彼は好奇心に富んだ怠惰者の一人である。我々が彼に従ふことによつて、苟くも一の價値を添へるやうに見えるといふのは、彼にとつて餘りに多過ぎる名譽でないか？

四七〇

饗宴に於ける多數者。——鳥をより近く觀察したり、其價値性を吟味したりすることなしに、鳥に撒き散らしてやるところの人の手から、我々が鳥の如く養はれてゐるとき、我々は如何に幸福なるかな！ 來たり飛び去つたりして、其嘴に如何なる名をも運ばない鳥の如く生活するのは！ 斯く多數者の饗宴に於て自ら飽くのは私の悦びである。

四七一

隣人に對する今一の愛。——興奮した、騒々しい、不定の、神經質な性情は、かの大なる感情にコントラストをなしてゐる——靜かな、暗鬱な火焰の如く衷心に住んでゐて、すべての熱いもの燃えるものを其處に集めつつ、人々を外観上冷靜に見えしめ、其容貌の上に無感動を印刻するやうな大なる

慾情に。此の如き人々は折々隣人に對する愛を示すことが出来る。けれどもその愛は、社交的な人々や享樂好きな人々などのそれと別である。それは溫和な、觀照的な、靜平な親しさである。それらの人々は謂はば、彼等の若でもあり、従つて彼等の牢獄でもあるところの、彼等の市城からのぞいて見る。見知らぬところ、廣濶なるところ、異つたところを望見するのは、彼等にとつて誠に愉快な事なのである！

四七二

自らを正しきものに言ひ做す。——A。だが、何故に汝は汝を正しきものに言ひ做さうとしないか？
B。私は、その場合に於ても、並びに幾つかの他の場合に於ても、それを爲し得た。けれども私は、正しきものに言ひ做すことに横ところの悦びを輕蔑する。なぜと云つて此等の事物は私にとつて十分に大きくない。そして私は、それらのつまらない連中が、『彼は此等の事物を甚だ重大視する！』と言ひ得たほど、彼等の惡意ある悦びを手傳ふよりも、寧ろ私自身の上に不評判を荷ひたいのである。これは眞實でない！ 恐らく私は私自らに對してより多くの思慮を用ひねばならなかつたであらう——
一の義務をもつ爲めに、私自らに關する間違つた觀念を矯正する爲めに。私は私自らに對して餘りに

無頓着に、餘りに怠慢である。従つて又私を通じて働くところのものに對しても。

四七三

何處に家を建つべきか。——汝が孤獨の中に汝自からを大きく生産的に感ずるならば、則ち社交は汝を小さくし荒涼たるものにするであらう。そしてこれを裏返しにした事が言へる。父のその如き力強き溫厚は——斯うした氣分が汝を掴む處には、そこに汝の家を築け——雜沓の中に於ても、乃至は寂寥の中に於ても。 *Ubi pater sum, ibi patria.*

四七四

唯一の方法。——『辨證法は、神的實在へ、そして現象の面衣の背へ到達すべき唯一の方法である。』これをプラトオが、嚴かに、同時に熱情的に主張するとき、シ。オペンハウエルは辨證法の反對について主張する。そして双方ともに間違つてゐる。なぜと云つて、彼等が我々にそれへの道を示さうとするところの物は存在しない。そして人類のすべての大なる慾情はこれまで、皆無に對する此の如き慾情でなかつたか？ そしてすべての其嚴めしさは——皆無についての嚴めしさでなかつたか？

四七五

重くなる。——汝等は彼を知らない。彼は自分自身に多くの重みをぶらさげるかも知れぬ。しかし彼はそれらの物すべてを高い所へ持つて行く。そして汝等は汝等の小さな鼓翼からして論結する——彼は此重みを自分自身にぶらさげる故、下を離れたくないのだと。

四七六

精神の收穫祭。——経験や、閱歴や、それらの物に就いての思想や、此等の思想に就いての夢想や、日毎に堆積し膨脹する——無量の、歡ばしき富は！ それを見れば目まぐるしい。私はもはや、何故に心の貧しき人々が幸福であり得るかを理解しない！ けれども、私は折々、私が疲勞してゐるとき彼等を羨望する。なぜと云つて此の如き富の管理は、困難な仕事である。そして其困難さは屢々すべての幸福を押し潰す。然り、ただそれを見るときといふだけで十分であつたなら！ 我々にして切めて、我々の知識のけちんぼうであつたなら！

四七七

懷疑から解放される。——A。他の人々は不機嫌になつて、弱くなつて、嘔み耗らされて、蝕ばんで、然り半ば食ひ盡されて、一般的な道德的懷疑から出て来る。けれども私は、前より以上に元氣よく且つ健全に、回復されたる本能を以て出て来る。より鋭い風の吹き、浪の逆巻く、そして小さからぬ危険の起らねばならぬところに、そこに私は幸福に感ずる。私は蟲にならなかつた——よし屢々蟲の如く働き、そして掘らねばならなかつたとは云へ。——B。汝は今こそ懷疑者たることを休めた！なぜと云つて汝は否定するから！——A。そして、然うすることによつて私は再び「然り」を言ふことを學んだ。

四七八

我々をして通過せしめよ！——彼を愛惜めよ！ 彼をその寂寥の中に置いてやれ！ 汝等は彼を全然粉碎してしまはうと云ふのか？ 彼は不意に何か熱すぎる物を注ぎ込まれたグラスのやうに響き破れた。そして彼は左様に高價なるグラスであつた！

四七九

愛と眞實。——我々は愛からして眞實のいやな違犯者になつた。そして我々に眞實と見えるより、より多くを眞實として通用させようとする、常習的の贓品隠匿者、竊盜になつた。この故に、思想家は時時、彼の愛する人々（それは必ずしも彼を愛する人ではないだらう）を逐ひ拂はなければならぬ——彼等がその刺と意地悪さを示し、彼を誘惑するのをやめることの爲め。従つて思想家の温情はその増減するところの月を持つであらう。

四八〇

避くべからざる。——汝等が如何なる經驗をするにもせよ、汝等に對して好意を感じない人々は、汝等の經驗の内に汝等を小さくすべき口實を見出すであらう！ 心意と認識との最も深き顛覆を経験し、結局平癒者として悼ましき微笑を含んで自由と輝かしき静けさとへ出て行つたとせよ。尙ほ且つ人は言ふであらう、『此男は彼の病氣を一の論證と見做し、彼の無力を凡ての者の無力の證據と見做す。彼は患ふ者共の優勢を感得することの爲め、病氣になるべく十分に浮誇である』と。さて又、誰かが

彼自らの桎梏を破碎して、其際自ら深き痛手を負うたとせよ。他の誰かが嘲笑と共に彼を指すであらう。『彼の拙さは如何に大なるかな！』と彼は言ふであらう、『そこには自分の桎梏に慣れてしまつた人間がある。しかも彼は、それを引きちぎるべく十分に馬鹿者である！』と。

四八一

二人の獨逸人。——若しもカントやシュオペンハウエルを、プラトオやパスカルやルッソやゲエテと、彼等の魂に關聯して、そして彼等の理智に關聯しててなく比較して見るならば、初めの二人の思想家は不利な地位に立たされる。彼等の思想は熱情的な魂の歴史を構成しない。そこには想見すべく如何なるロオマンズも、如何なる危機も、破綻も、死闘もない。彼等の思索は同時に魂の自からなる傳記でなく、寧ろ、カントの場合にあつては一の頭の歴史である。シュオペンハウエルの場合にあつては一の性格（不變の）の記述と反映とであり、『鏡』その物、即ち優秀なる理智に合することの悦びである。カントは、彼の思想を通して光るとき、最善なる意味に於てけなげな、尊敬を値する人物として、しかし乍らつまらない人物として現はれる。彼には幅と力が缺けてゐる。彼は餘りに多くを経験しなかつた。そして彼の仕方は、何物かを経験すべき時間を彼から取り去つた。勿論私が經驗といふ

のは、粗悪な外部的『事件』のことでなく、最も寂しき最も静かなる生活にも起るところの、又幾分の閑暇をもつて居り、思想の熱情の中に燃え盡きるところの運命や痙攣のことである。シ。オベンハウエルは彼に一步を先んじてゐた。シ。オベンハウエルは少くとも、憎悪や、熱望や、虚榮や、不信などの中に、性情の或る激烈な醜さを有つてゐた。彼は暴烈な氣質を賦與されて居り、又斯うした暴烈に對する時と餘裕とをもつて居つた。けれども彼には、彼の思想範圍にも缺けてゐたやうな『發展』が缺けてゐた。彼は何等の『歴史』をももつてゐなかつたのである。

四八二

仲間を求める。——かの、宜しき時に於て火に投げ込まれ、取り出されたる栗の如く、軟かく、旨しく、滋養あるものになつたところの人々を、我々が仲間にしようとするとき、そもそも我々は餘りに多くを求め過ぎるといふべきであるか？ 生活から僅かな物を期待し、その僅かをも彼等自らの眞價としてより、むしろ贈物として受取る（あだかも鳥や蜜蜂がそれを彼等へ運んで來たかのごとく）ところの人々を！ 苟くも、自ら報酬されて感じ得べく、餘りに自尊心をもつたやうな人々を！ 又名聲に對する時や悦びを有つべく、知識と正直との欲情に於いて嚴肅すぎるやうな人々を！ かくの如き

人々を我々は哲學者と呼ぶ。しかし彼等自からは常に、より謙遜な名稱を見出すであらう。

四八三

人間に對する倦怠。——A。認識せよ！ 然り！ けれども常に人間として！ 如何に？ いつも同じ喜劇の前に坐し、同じ喜劇を演ぜねばならぬか？ 此等の自からの他、如何なる目からも事物を見得ないで？ しかも尙ほ、その器官が認識にまでより適應してゐるやうな物の、如何に數知れぬ種類があり得るかよ！ すべての其認識の結局に於て。人類は何を認識したであらうか？ 彼等の器官は！ それは恐らく次ぎのやうに言ふことになるだらう——認識の不可能を！ 慘苦と嫌惡とを！ B。これは悪しき襲撃である。——理性が汝を襲撃してゐる！ しかし乍ら明日汝は復び認識の眞中にゐるだらう。従つて又非理性の眞中にゐるだらう——即ち人間的なものに對する悦びの中にゐるだらう。我等をして海へ行かしめよ！

四八四

自己の道。——我々が決然たる轉歩をなし、『自己の道』と稱せられるところの道を追ふとき、不意

に一の秘密が我々に現はれる。我々と親しく、我々と信任し合つてゐたすべての人々は、これまで自らを我々より優つたもののやうに思つてゐた。そして氣持を悪くされてゐる。彼等の間の最善なるものは、寛宏である。そして、我々が『正當なる道』——彼等は固よりそれを知つてゐる——を今一度見出すであらうまで、辛抱強く待つてゐる。他の者等は嘲笑する。そして宛かも我々が一時的に氣が觸れたかの如く言ふ。或は意地悪く誘惑者を指摘する。より悪意ある者等は、我々が浮誇な痴人であるやうに言ひ、我々の動機を黒くしようと努める。そして最も賤惡な者等は我々の中に其最も賤惡な敵を見る。長い倚屬の間復讐に渴いてゐたところの敵を見る。そして我々を恐れる。さらば我々は何を爲すべきか？ 思ふに我々は、あらゆる種類の罪惡に對する一年間の赦免を、我々に知られたるすべての人々に約束することを以て、我々の統治を始めるべきである。

四八五

遠景。——A。しかし乍ら、斯うした孤獨は何故か？——B。私は何人をも怒つてはゐない。だが、ただ一人でゐるとき私は、私の友人達と共にゐる場合よりも、彼等をより明らかに且つより美しく見ることが出来るやうだ。そして私が音楽を最も多く愛したり感じたりしたとき、私は彼等から離れて

生活した。私は事物について善く考へる爲めに、遠景を須ひねばならないやうに見える。

四八六

金と空腹。——ここ其處に、接觸する一切の物を金に換へるところの人間がある。しかしながら意地悪き或る日彼は、彼自らそれによつて餓ゑねばならぬことを發見するであらう。彼の周囲のあらゆる物は輝かしく、立派に、近づけないほどに理想的である。そして今彼は、金を以て引換へるべく全然不可能であるやうな物を熱望する。そして如何に彼が熱望するよ！ 空腹者が食物に對する如く！ さて彼は何をか掴むであらう？

四八七

羞恥。——そこに見事な駿馬が立ち、地を掻き掘つてゐる。それは鼻を鳴らし、一乗りを願ひ求めてゐる。そしていつも乗つてくれるところの人間を愛してゐる。けれども嗚呼羞恥よ！ 其人間は今日飛び乗ることが出来ない。彼は勞れてゐる。かくの如きは疲勞したる思想家が、彼自らの哲學の前に感ずる羞恥である。

四八八

愛の浪費に對して。——我々は我々自らを激烈な憎悪の中に捕へるとき。顔を赤くしないか？ しかしながら我々は、激しき嗜好の場合にも然うしなければならなかつた！ その中にも横つてゐるところの不正の故に！ 否更に切言すれば、ある人々は誰かが彼等に其嗜好をあまりに甚だしく表示し、その爲め他人に對する嗜好まで取り去つてしまふほどになると、其胸を締め付けられるやうに感ずる。彼の聲の調子は、我々が選抜されたものであることを現はし示す！ けれども嗚呼、私は此選抜に對して感謝の念を抱いてゐない。私は私をかくも特別扱ひにしようとする人間に、私が恨みを懐いてゐることに心附く。彼は他人に損をかけて私を愛してはいけなかつたのである！ 私は私自ら我慢すべく心掛けたであらう！ そして屢々倨傲に充ちた胸と、倨傲にまでの理由とをもつた。かくの如き物を有する、かくの如き人間にまで、他の人々の要する、切要するところの物を與へるべきではないのである。

四八九

困却してゐる友人。——折々我々は、我々の友人の一人が我々にまでよりも他の一人にまでよりも多く屬してゐることに心附く。彼のデイリカシイが斯うした別離に際して苦み惱むこと、彼の身勝手が斯うした別離に堪へるところまで來てゐないことに心附く。其場合我々はそれを彼にたやすくしてやり、彼を我々から縁遠くしてやらねばならぬ。これは我々が、彼にまで有害かも知れないやうな考方をするやうになつた場合、必要な事でもある。彼に對する我々の愛は、我々が我々自身の上に加へる非行によつて、我々からの斷交を彼に心苦しく感じさせないやうにさせなければならぬ。

四九〇

此等の小さな眞實。——『汝等はこの一切の事を知つてゐる。けれども汝等は曾つてそれを經驗したことはない。私は汝等の證據を受取らない。此等の「小さな眞實」よ！——それらの物が汝等に小さく見えるのは、汝等が汝等の血を以て拂はなかつたからである！』——しかし乍ら、それらの物は、それに對して餘りに多く拂はれたからと云ふので大きいか？ そして血は常に「餘りに多く」である！ 『汝等は然う思つてゐるか？ 汝等は血に對して如何に貪婪なるかな！』

四九一

それ故に寂寥。——A。さらば汝は再び汝の荒野へ歸らうと欲するか？——B。私は急速でない。私は私自身を待たなければならぬ。いつでも水が私自身の泉から出て来るまでには、それが遅くなる。そして屢々私は、私が忍耐するよりも、より久しく渴きを経験しなければならぬ。それ故に私は寂寥へ行く——各人の水滴から呑まないことの爲め。多くの人々の間にゐては、私は多くの人々の如く生き、私自身の如く考へない。少時の後それは常に、人々が私自身から私を逐ひ出し、私から魂を奪はうとするかのやうに見えた。そして私は各人を憤り、各人を恐れるであらう。そこで荒野は、再び心持善くなる爲め私にまで必要になつて来る。

四九二

南風の下にて。——A。私は最早私を理解しない！昨日はまだ私自身を左様に暴風雨的に、同時に左様に温かく、左様に日當り良く、又極限にまで明るく感じてゐた。然るに今日は！一切が今やエネディの入江の如く靜かに、廣く、陰鬱に、暗い。私は何物をも意欲しない。そして深い息を吐いてゐる。しかも尙ほ私は心密に這の『何物をも意欲しない』を憤つてゐる。かく浪は私の憂鬱の海に起伏してゐる。——B。汝は其處に、一の小さな愉快な病氣を描いてゐる。次ぎの東北風は、それを汝からとり去るであらう——A。だが、それは何故に？

四九三

自分自身の木に。——A。私は如何なる思想家の思想からも、私自身の思想からほど、それほど多くの悦びを感じない。これは勿論彼等の價值に關して何物をも言はない。けれども私は、私にとつて最も旨き果實を閑却すべく——それが偶然私の木になるのだからと云ふわけで——痴人であらねばならなかつた！そして私は曾つて然うした痴人であつた。——B。他の人々の場合は反對だ。それも彼等の思想の價值に關して何物をも言はない。或はそれが彼等の價值に反對した如何なる論證でもないのである。

四九四

勇敢な人々の最終の論證。——『此藪には蛇がゐる。』——宜しい、私は其藪へ入つて行つて、それ

を殺してやらう。——『だが、恐らく汝は其場合犠牲になる。そしてそれは汝の犠牲にならぬであらう！』——だが私は何の關するところぞ！

四九五

我々の教師。——青年時代には、我々の教師や指導者は現在から、又我々が直接ぶつかるサアクルから取られる。我々は無思慮に信じてゐる——現在は、他の各の人よりも我々により多く適應するやうな教師を有たねばならぬと。又我々は、多く求めることなしにそれを見出さねばならぬと。あとで我々は此子供らしさに重い償ひをしなければならぬ。我々は我々自身の中に我々の教師を賠償しなければならぬ。やがて我々は本當の指導者を全世界(前世界をもこめて)に探し廻る。けれども、それは恐らく餘りに遅い。そして最も悪いことには我々は、彼等が我々の若かつたときに生きてゐたことを發見する。そして我々が其時機會を掴み損つたことを發見する。

四九六

惡主義。——プラトオは、如何に哲學的思想家が各の現存社會の中に、あらゆる兇惡の典型として

通用せねばならぬかを立派に記述した。なぜと云つて、あらゆる道義の批評家として彼は、道義的な人々の反對である。そして新しき道義の立法者になることに成功しない限り、彼は人々の追憶の中に、『惡主義』として殘留する。我々はこれからして村度することが出来る——あのかなり自由な、改革好きなアテンの市が、如何にプラトオの生存中彼の名聲を玩具にしたかといふことを。されば彼自らの言ふごとく、『政治的衝動』を體の内にも有したる彼が、其頃丁度地中海希臘合衆國の出來上らうとしてゐたらしいシチリアに於て、三度企てをなしたといふのに何の不思議もないではないか？ マホメットが其後彼の亞刺比亞人共の爲になしたところのものを、プラトオがすべて希臘人共の爲になさうと考へたのは、此合衆國に於ての事であり、又その助けをかりての事であつた——即ち、大小の慣習を、取り分け各人の毎日の生活方法を確立しようとして考へたのは。彼の思想は、マホメットのそれと同様に可能であつた。だが、多くの信ずべからざるものも、基督教のそれも可能として證明された！ 少しばかりの偶發事だけより少なく、又少しばかりの偶發事だけより多かつたら、此世界は南歐のプラトオ化を見たことであらう。そして若しも、此情態が今日も尙ほ續いてゐたなら、我々は恐らくプラトオを『善主義』として尊敬したであらう。けれども、其成功は彼に來なかつた。そして彼には夢想家の理想郷家の評判が残つてゐる。より厳しき名は、古代アテン人共に滅び去つた。

四九七

純化するところの目。——『天才』に附いては、プラトオヤ、スピノオザヤ、ゲエテに於けるが如く、精神が性格や氣稟にただ寛かに結び附いてゐる——彼等からたやすく分離し、それから彼等のすつと上に出ることの出来る、翼ある生物の如く——やうに見える人々に於て、最も立派に談ることが出来る。これに對して、その氣稟から決して脱離せず、その氣稟に最も理智的な、最も大なる、最も普遍的なる、否時としては宇宙的な表白を與へることを知つてゐたやうな人々は(例へばシ。オベンハウエルの如き)、その『天才』に就いて最も活潑に談つた。此等の天才は彼等自らを超越し得なかつた。けれども彼等は、彼等が何方へ飛ばうとも、自らを見出し、再び見出すべきことを信じた。これが彼等の『偉大』である。そして偉大であり得る！ この名稱により適當したる他の人々は、純なる、純にするところの目を有つてゐる。それは彼等の氣稟や性格から生ずるやうに見えない。むしろそれらの物から離れて、又大抵の場合、それらの物に對する溫和なる矛盾に於て、一人の神を見、その神を愛することく世界を見る。しかし、彼等にも此目が一邊に與へられたのではない。そこには見ることの實習や豫備校がある。そして本當の幸福を有する人は、宜しき時に於て純なる視覺の先生をも見出すのであ

四九八

要求するな！——汝等は彼を知らない！ 然り、彼はなやすく且つ自由に自らを、人及び物に讓つてしまふ。そして双方へ對して深切である。彼の唯一の願ひは安息に置かれることである——しかし乍ら唯だ、人や物が讓歩を要求しない限りに於てのみ。如何なる要求でも彼を尊大にし、内氣にし、好戰的にするのである。

四九九

邪惡なる者。——『ただ孤獨なる者だけが邪惡である！』とデイドロオが叫んだ。そして直ぐにルッソオが甚だしく機嫌を悪くした。かくて彼は、デイドロオが正しかつたことを承認した。全くのところ社會及び社交の眞中では、各の邪惡な本能が左様に多くの拘束を自らに加へなければならぬ。左様に多くの假面をかぶらなければならぬ。自ら左様に屢々徳の「拷問の床」に横はらなければならぬ——邪惡な者の殉教と云ふことが言ひ得られるほどに。孤獨にあつては、總べての斯うしたものがなくなる。

邪悪な者は、孤獨に於て最も邪悪である——最も善くすらも邪悪である。従つて、到處にただ劇をのみ見る人の目には、最も美しくさへも邪悪である。

五〇〇

本性に逆行して。——ある思想家が、幾年間も本性に逆行して思想すべく自ら強ひることはあり得る。換言すれば、彼の衷心に湧くところの思想に従はず、寧ろ一の役職や、規定された時間割や、押しつけられた精勵が彼に負擔さすやうな思想に従ふべく、自ら強ひることはあり得るのである。しかし乍ら、結局彼は病氣になる。なぜと云つて這の見たところの道徳的な自制は、彼の神経力をすつかり駄目にしてしまふ——唯だ一の定則にされた淫蕩のみが爲し得るほどに。

五〇一

死ぬべき魂。——知識に關して言へば、最も有用なる獲得物は恐らく、不死の魂に對する信仰が廢棄されたといふことであらう。今人間は待つことが出来る。彼等はもはや、前にせねばならなかつたやうに、怪しげな思想を大急ぎで鵝呑みにすることを要しない。なぜと云つてあの時分憐なる『永久

の魂』の救済は、短生涯の間のその知識に規定された。それは今日から明日へ決定されねばならなかつた。そして『知識』は驚くべき重要事であつたのである！ 今我々は、誤謬や、試験や、豫測なぞへの善き勇氣を再び奪取した。これは總べて左様に重要でない！ そして丁度此故に、個人と全人類とは今、従前狂氣のごとく、天堂と地獄の蔑視のごとく見えただであらうほど大きな仕事に面するかも知れない。我々は我々自らの上に實驗して見ることの權利を有する！ 然り、人間は然うして見ることの權利を有する！ 最も大なる犠牲はまだ知識へささげられなかつた。然り従前では、今我々の行爲に先立つ如き思想を、唯だ豫感するだけでも、瀆神であり、永久の救済の放棄であつたであらう。

五〇二

三の異なる情態に對する一の言葉。——欲情の場合ある人は、野蠻な、恐るべき、忌まはしき動物を飛び出させる。第二の人は欲情を通して高き、大なる、華かなる行狀へのぼつて行く。それに比べると平常の彼の生存は随分みすばらしく見える。第三の人は徹頭徹尾高貴にされて、最も高貴なるストルム・ウント・ドゥラングをも有する。彼は此情態に於て野蠻な美しい自然である。そして彼が通例表現するところの、大なる、穩かに美しき自然より、ただ一段だけ深い。しかし乍ら彼は、欲情に於

て人々からより多く理解され、恰かも此瞬間の故にこそより多く尊敬される。彼はその時彼等へ一步より近く且つより有縁なのである。彼等はかくの如き光景に對して狂歡と驚愕とを感得し、その時にこそ彼を神的と呼ぶのである。

五〇三

友情。——我々が哲人的生活で以て我々の友人にまで無用になると云ふ、哲人的生活に對するかの非難は、決して近代人の心に起つて來ないだらう。それは寧ろ古代的である。古代人は友情を深く且つ強く生活し、思想し、殆んど墓地まで持ち込んだ。これは我々に對する彼等の先鞭である。これに對して我々は、理想化された性愛を指示しなければならぬ。古代人のすべての大なる卓越は、男子が男子の側に立つたと云ふこと、如何なる婦人も彼の愛の最も近きもの、最も高きもの、否唯一のものたるべき要求をなし得なかつたと云ふことの内に根據を置いた。思ふに我々の木は、それに絡み着いたる蔦や葡萄蔓の故に、左様に高く成長しないであらう。

五〇四

調停。——抑も哲學の任務は、子供の學び知つたところの物と、大人の認識したところの物とを調停するにあるべきか？ 哲學は丁度青年の任務であるべきであらうか？——それが子供と大人との間に立ち、中間的な需要を有つてゐる故に。殆んどそれはさう見えるであらう——如何なる年齢に於て哲學者等が彼等の着想を得るのを常とするか考へて見たならば。けだし彼等は、それが信仰にまで餘りに遅く、知識にまで餘りに早いやうな時期に於て、その着想を得るのである。

五〇五

實際的な人々。——我々思想家はあらゆる事物の美味を先づ決定し、尙ほ必要に應じてはそれを布告しなければならぬ。實際的な人々は結局我々からそれを受取る。我々に對する彼等の信頼は本當にも出來ないほど大きい。そして世上の最も滑稽なる光景である——彼等がそれに就いて如何に僅に知つてゐるとは云へ、そして彼等が我々非實際的な人間に對して如何に高慢な口の利きかたをしようとも。然り彼等は、彼等の實際生活をいやしめることさへするであらう——我々にして、それをいやしめようとしたならば。そして我々は折々、一寸した復讐感情からさうした侮蔑にまで刺戟されないものでもない。

五〇六

あらゆる善き物の必要なる乾燥。——如何に！我々は一の作品を、それが産出されたる時代の如くして理解せねばならぬか？ だが、左様にしてそれを理解しないとき、より多くの悦びを、より多くの驚きを、又より多くの修得をさへ経験する！ 汝等は心附かなかつたか？——各の新しき善き作品が、その時代の濕潤な空氣の中に横つてゐる限り、その最小の價値を有するといふことを。しかも丁度、それが尙ほ左様に甚だしく市場や、敵對や、最近の意見や、今日と明日との間なるすべての一時的な物の匂を持つてゐる故に！ あとではそれが乾燥し、その『現實性』がなくなる。そして其時はじめて、その深い光と芳香とを得て来る。否、それに決定されてゐたならば、永久の靜穩な目を得て来る。

五〇七

眞理の専制に反對して。——我々がすべての我々の意見を眞實だと思ひ做すほどそれ程狂愚であつた場合にすらも、尙ほ且つ我々は、それらの物だけが存在することを欲はないであらう。私は、何故

に眞實の獨裁や全能が願望すべきであつたかを知らない。私には、眞實が大なる權力を有すると云ふだけで十分だつた。しかし乍ら眞實は戰ふことが出来、又敵對に會しなければならぬ。そして我々は折々眞實から不眞實へ逃げ出して、そこに休養し得なければならぬ。でなければ、眞實が我々にまで退屈なもの、力なく味なきものに成り、そして我々をも同様なものにするであらう。

五〇八

哀切に取らぬ。——我々が我々自らに利すべく爲すところの物は、我々に何等の道德的讚辭をも招致し得ない——他人からも、自分からも。これは、我々が我々自らを娛ますべく爲すところの物に就いても言へる。此の如き場合に於て哀切に取ることを避け、すべての哀切な感情から自らを制するのは、すべてのより高尚なる人々の間に上品な事と見做される。そしてこれに慣れたる人は、その天真を取り返してゐる。

五〇九

第三の目。——如何に！ 汝はまだ劇場を要するか？ 汝はまだ左様に若いか？ 賢くなれ。そし

て悲劇や喜劇がより善く演じられるところに、それらの物を求めよ！ それがより面白く、より熱心に演じられるところに！ 此等の場合單なる見物たるに止まつてゐるのは、全く容易な業でない。けれどもそれを學べ！ そして困難な、悲痛な殆んどあらゆる地位に於て、汝は悦びと避難と一の小さな戸口を有する——汝自身の欲情が汝を襲撃するときすらも。汝の劇場的な目を開け。この他の目を通して世界を観るところの、あの大きな第三の目を開け！

五一〇

自分の徳から逃げ出す。——時あつては自分自身の徳から逃げ出すことを知らぬやうな思想家が何になる！ 彼は實に、『單なる道德的存在』であつてはならないのである！

五一一

誘惑の女。——正直はすべての狂信家の大なる誘惑者である。ルウテルへ悪魔の、もしくは美しき女の姿に於て近づくやうに見えたところのものは、又彼が粗暴な態度で以て逐ひ斥けたところのものは、恐らく正直であつた。加之、より希なる場合に於て眞實でさへもあつた。

五一一

事務に對して大膽なる。——その本性からして、人間に對し思慮深く、或は小心であるところの、しかし乍ら事物に對して大膽であるところの人は、新しき、より近き相識に對して恐怖する。そして其舊い相識に制限する——彼の *incognito* と彼の無思慮とが眞實と一致し得ることの爲め。

五一二

限界と美と。——汝は美しき文化をもつた人々を求めるか？ さらば汝は、汝が美しき地方を求めるときに如く、制限されたる眼界と見解とを以て満足しなければならぬであらう。固よりそこにはパノラマ的な人間もある。彼等はパノラマ的地方の如く、物珍らしく且つ教訓的である。しかし美しくはないのである。

五一四

より強き者へ。——汝等より強き、倨傲なる理智者等よ。ただ一の事に就いて汝等に請ひ求める。

我々他人に如何なる新しき重荷をも置くな。むしろ我々の重荷からの若干を汝等自らの上に取れ。汝等はより強き者である故に！ けれども汝等は好んで反対の事を爲す。なぜと云つて汝等は飛ばうとする。そしてそれ故に我々は我々自らの重荷の上に汝等のを加へねばならぬ。乃ち、我々は匍行せねばならないのである！

五二五

美の増加。——何故に美は文明と共に増加するか？ なぜならば、文明人の間では、醜への三の機會が希に、愈々希になるからだ。三の機會とは、第一に熱情の最も激烈なる爆發、第二に極端な程度に於ける肉體的運動、第三に眼前することによつて恐怖を起させる必要。これはより低き、より危険なる文明階級に於て随分大きく且つ度々あることで、それが行儀作法を制定し、醜惡を義務にする位である。

五二六

我々の惡鬼を隣人共にはひらせない！ ——我々の時代にあつては我々をして、好意と善行とが善

人の特色であるといふことを、いつまでも信仰し続けしめよ。ただ我々をしてそれに附け加へしめよ、『彼にして先づ、彼自らに對し好意を有ち、善行をしよう』と云ふ氣でゐたならば』と。なぜと云つて、若し彼が斯う云ふ氣でゐなかつたならば、即ち、若し彼にして自分自身を逃げ、自分自身を憎惡し、自分自身に害を加へるならば、彼はたしかに善人でないからである。其時彼は唯だ他人共に於てのみ、自分自身から自身を救ふ。この他人共をして用心せしめよ——彼が彼等へ、如何に好意ありげに見えるやうとも、彼等が右の場合彼の爲めに困厄しないですむことの爲め！ しかし乍ら、この自我を逃げたり憎惡したりし、他人に於て、他人の爲めに生きると云ふのは、これまで無思慮にしかも確信的に、『非利己的』と呼ばれ、従つて『善』と呼ばれて來てゐる。

五二七

愛へ誘ふ。——自分自身を憎惡する人間を、我々は恐れなければならぬ。なぜと云つて我々は、彼の憤怒や彼の復讐の犠牲になり勝ちなものだから。されば我々をして心掛けしめよ——彼を彼自らに對する愛へ誘ふべく！

五一八

あきらめ。——何があきらめであるか？ それはある病人の最も氣樂な地位である——久しい間、それを見出す爲め苦みの中に横つてゐたところの、それによつて疲れて來たところの、そして今それを見出したところの病人の、最も氣樂な地位である！

五一九

欺かれる。——汝等が行動しようと思ふや否や。汝等は疑ひにまで扉を閉ぢなければならぬ——斯く行動の人は言つた。さて汝は、斯くして欺かれた者に成ることを恐れないか？——斯く瞑想家は答へた。

五二〇

永久の葬式。——誰かが事によると、歴史を乗り越えて一の持續された弔辭を聞くやうに思つたかも知らない。我々は我々の最も愛する者を、思想や希望を葬つた。そしてやはり葬つてゐる——その

代りに誇りを、*gloria mundi* を、即ち弔辭の華觀を受取り乍ら。かくして一切の物が善くされることが出来る！そして弔辭家は今尙ほ最も大なる公の善行者である！

五二一

異例の虛榮心。——かの人は一の高き性質を有つてゐる。それが彼の慰藉として役立つ。彼の存在の殘餘の上へ——それは殆んど總ての殘餘である——彼の目は侮蔑的に走る。けれども彼は、彼が謂はば彼の聖殿へ行くとき、自分自身から回復する。そこへの道が既に彼にまで、廣い軟かな階級の登昇のやうに思はれる。しかも尙ほ汝等殘酷なる者等は、この故に彼を虛榮であると云ふ！

五二二

耳なしの智慧。——毎日、何が我々に就いて語られるかを聞くのは、或は何が我々に就いて考へられるかを究明するのは、それは最も強い人間をでも殺してしまふ。されば他の人々は實に、毎日我々の上に權利を振り廻す爲め、我々をして生きしめる！ 彼等は實に、我々が彼等の上に權利を要求した、もしくは要求しようとしたとき、我々を恕さないであらう！ 要するに我々をして、一般的和合

に犠牲をささげしめよ。我々に就いて語られ、賞讃され、非難され、願望され、希望されるとき、我をして耳を傾けしめるな。否我々をしてそれを考へることすらもなさしめるな！

五二三

質疑。——ある人が見えしめるところの一切の事物に於て、我々は問ひたづねるかも知らない——それは何をかくすつもりなのか？ それは何から我々の目を逸らさせるつもりなのか？ それは如何なる豫断を起させるつもりなのか？ そして更に、どの程度まで此ごまかしのごまやかさが行つてゐるか？ そして如何なる點に彼が誤つてゐるか？

五二四

孤獨な人々の嫉妬。——社交的な性情と孤獨な性情との間には此相異がある（双方ともに理智を有つてゐるとしたならば！）。前者は如何なる事物に對しても満足する。或は、殆んど満足する。彼等が其事物に關する告知し得べき具合よき變向を彼等の理智の中に見出したや否や、彼等は悪鬼その物とすらも妥協する！ けれども孤獨な者共は、彼等の無言の狂喜を、一の事物についての無言の苦みを

もつてゐる。彼等は彼等の衷心の問題の、才氣煥發な展示を嫌惡する——彼等が彼等の愛人共に於けるあまりに吟味され過ぎたる衣装を嫌惡することく、彼等はその時憂鬱に彼女等を眺める——あだかも、彼女等が他人を悦ばす氣だなと疑ひを起しつつあつたかのやうに！ これは *jealousie* に對する總ての孤獨なる思想家等及び熱情的な夢想家等の嫉妬である。

五二五

賞讃の効果。——ある人々は大なる賞讃を受けて内氣になり、他の人々は厚顔になる。

五二六

象徴になりたくない。——私は君主等を氣の毒に思ふ。彼等は一時的にも自己を社交の中に減却してしまふことを許されない。かくて彼等は人間をただ、面白からぬ地位及び矯飾からのみ知ることを學ぶ。何物かを意味すべく不斷の拘束は、彼等を結局事實上、嚴肅な皆無にしてしまふ。かくの如きは、象徴たることの中にその義務を見るやうな、すべての物の運命なのである。

五二七

隠されたる人々。——その有頂天になつた心胸をすら取つつかまへたり押へたりするところの、又群衆の羞恥を失ふよりも、むしろ無言になりたいところのそれらの人々を、汝等はまだ見出さなかつたか？ そしてそれらの厄介な、しかも屢々左様にお人善しな人々を、汝等はまだ見出さなかつたか？——認知されることを欲しないところの、砂の中なる彼等の足痕を、いつも消してしまふところの、いつまでも隠されたる人々であることの爲め、他人の前にも自分自身の前にも欺瞞者であるところの人々を！

五二八

希なる忍耐。——他人を批判すまいとするのは、又彼について考へることを自ら拒むのは、往々にして小さからぬ温情の徴證である。

五二九

何によつて人々と國民とが光輝を獲るか。——如何に多くの純粹に個人的な行動が爲されずにあるかよ——それを遂行する前に我々が、その誤解されることを洞見したり、猜疑したりする故に！ 例へば、善惡に於て兎に角價值を有するやうなそれらの行動が。されば一の時代一の國民がより高く個人を評價すればするほど、又彼等により多く權利と優勝とが承認されればされるほど、愈々さうした種類の行動は明るみへ押し出して來るであらう。かくて終には正直や、善惡に於ける純粹の光輝が、時代及び國民全體の上に廣がり、彼等は（例へば希臘人などの如く）彼等の没落のあと尙ほ數千年に亘つて、多くの星辰のごとく輝き続けるであらう。

五三〇

思想家の迂回。——多くの人々に於て、彼等の思考の進路は、峻嚴で無暗に大膽である。否時としてはそれ自身に對して殘忍である。しかし乍ら、個人個人としては彼等は溫厚にして從順である。彼等は好意ある逡巡を以て、一の事項の周圍を十廻も廻つて見る。けれども結局彼等は其峻嚴な道を追ひ進む。それは多くの彎曲やかけ離れた隱遁所をもつた流のやうな物である。その進路の間には、流が自分自身とかくれんぼをやつたり、鳥や樹木や洞穴や瀑布などで短い牧歌を拵へたりするやうな場

所がある。やがて、彼は今一度まっしぐらに、岩を乗り越え、最も硬い石の間を押し分けて突き進むのである。

五三一

藝術に對する異つた感情。——我々が隱遁的社交的に、消耗しつつ且つ消耗されて、深い多産的な思想と共に、ただそれらの思想と共にのみ生活する時以來、我々は藝術から従前より以上の何物をも期待しない。或は従前と全く異つた何物かを期待する。換言すれば、我々は我々の趣味を變へる。なぜと云つて従前我々は、藝術の門戸を通じて一瞬間、我々が今持續的に棲息してゐる要素へはひり込まうとした。其時分我々はそれで以て所有の狂喜を夢想した。そして今我々は所有してゐる。然り、我々の今所有するところの物を一時の間放棄し、自らを貧しきものに、子供として、乞食として、痴人として夢想するのは、それが今は折々我々を狂喜させ得るのである。

五三二

『愛は等しくする。』——愛は、それが自らをささげるところの他人にまで、縁遠さのあらゆる感情

を無くさせたいと欲ふ。従つて矯飾と模擬とに充たされる。絶えず欺瞞する。そして實際にはないところの同等を装ふ。これは左様に本能的に起ることなので、愛してゐるところの婦人等は、此矯飾と持續的な最もディリケエトな欺瞞とを否定する。そして、愛が等しくする（言ひ換へれば、それが一の奇蹟を行ふのだ！）と云ふことを大膽に主張する。此經過は單純である——ある人間が愛される儘にし、自ら矯飾することを必要に感ぜず、むしろこれを他の愛するところの者に委して置くならば。しかし乍ら、如何なる戯曲にもより紛糾し、より錯雜したる場合はない——双方とも相互に對する申分なき熱情の中にあるとき、従つて、各人が自らを投げ出し、自らを他人ににせ、ただ彼にのみ等しくしようとするとき、そして何人も遂に、何を真似るべきか、何をごまかすべきか、何を装ふべきかを知らなくなる時に比べては、此劇の美しき狂愚は、此世界にとつて餘りに善過ぎる。そして人間の目にとつて餘りに精妙過ぎるのである。

五三三

我等初學の徒は！——ある俳優は、他人が舞臺に立つてゐるのを見るとき、如何に多くの物を洞見し付度するかよ！ 一の筋肉がある身振に於て役に立たないとき、彼はそれを知つてゐる。別々に、

冷かに鏡の前に實習される、そして全體と調和しさうにないところの、それらの小さなわざとらしきやりかたを差別する。俳優が彼自らの發明によつて舞臺の上に驚かされる時、又其驚きの中にそれを駄目にしてしまふとき、彼はそれを感じ得る。ある畫家が彼の前に動いてゐる人間を見るときはまた如何に異つてゐることぞ！ 即ち彼は直に、現在せる物を完全すべく、またそれに全き効果を與へる爲め、その上の多くの物を見る。彼は心の中に、同じ事物のいろ／＼な光飾を試みる。彼は彼の加へる一の對照によつて、効果の全體を分割する。ああ我々にして此俳優や此畫家の目を、人間の魂の國の爲めに有つてさへゐたならば！

五三四

小服量。——一の變化が出来るだけ深みへはひつて行くことの爲めには、我々は藥劑を極小量に於て、しかし乍ら怠らず久しきに互つて用ひなければならぬ！ 如何なる大なる事が一度に爲され得るか！ されば我々をして、我々の慣れてゐる道德の情態を、事物の新しき評價と輕忽に荒つぽく取り換へないやうに用心せしめよ。否、我々はその内に尙ほ久しく、久しく生活し續けるであらう——我々が恐らくは甚だ遅く、その新しき評價が我々の中に優勢になつて來たといふこと、そして我々の

今後慣れねばならぬ、その小服量が、我々の中に新しい性情を置いたといふことを知るに至るまで。我は今又理解しはじめる——評價の大なる變化に於ける、しかも政治的事項に關する最終の試み『大革命』が、最早一の哀切な、血塗みれの香具師的行爲（それは突然の危機によつて輕信的な歐羅巴に突然の回癒の希望を吹き込むことを知つてゐた。そしてそれ故に、總ての政治上患者を此瞬間まで性急に且つ危険にした）以上のものでなかつた。

五三五

眞實は力を要する。——それ自體としては、眞實は全然何等の力でもない——いかに常に阿諛的な啓蒙家が反對の事を言ふべく慣れてゐようとも！ 眞實は寧ろ力を其側へ引き付けねばならぬ。或は自分を力の側へ持つて行かねばならぬ。でなければ、それはいつもいつも亡んでしまふであらう！ これは既に十分に、十二分に證明されてゐる！

五三六

擗刑具。——如何に殘忍に各人がその二三の私徳を、他人等——偶然それを持たないところの——

に負擔させるか、如何に彼が彼等を苦め悩ますかをいつもいつも見るといふのは、結局腹立たしくなる事である。されば我々をして『正直感』を人情深く取扱はしめよ——今尙ほ其信仰を全世界に強ひようとする總べてのそれらの大なる自己中心者をさんざ苛めぬいてやる爲めに、我々が其正直感の中に搾擷刑具を有つてゐるとは云へ。我々はそれを我々自らの上に試験した！

五三七

練達。——練達は、人が遂行を誤らず、もしくは躊躇しない時に獲得される。

五三八

天才の道德的亂心。——大なる精神の一定の種類に於ては、一の痛ましき部分的に恐るべき光景が觀察される。彼等の最も生産的な瞬間に於て、天高く遠方への彼等の飛翔は、彼等の構造全體に適應してゐないやうに、又いかにかして其力を超越してゐるやうに見える。そこで毎回の不結果が、長い間には器械全體の不完全が残る。さて又此後者は、此處に擧げられた如き左様に高く精神的なる性質の人々の間では、いろいろの道德的及び理智的徴候に於て、肉體的困迫に於てよりも、ずつとより規

則正しく認識されるのだ。かくの如く、突然彼等から現はれる理解しがたき臆病や、浮誇や、毛嫌ひや、嫉妬や、強迫や被強迫などは、ルツオオヤシ。オペンハウエルのその如き性情に於ける、それらの全く餘りに個人的にすぎるもの及び不自由なものは、恐らく一の定期的心臓疾患の結果であつたらう。しかし乍らこれは又一の神経疾患の結果であり、最後のこれも又——（譯者註——原文でも缺けてゐる）。天才が我々の内に住んでゐる限り、我々は敢爲である。否狂愚に近い。そして生命をも、健康をも、名譽をも願感しないのである。我々は晝間鷺のごとく自由に飛び廻る。そして暗闇の中には梟よりも安全に感じてゐる。しかし乍ら一旦天才が我々を去れば、忽ち深い恐怖が我々の上へ落ちて来る。我々はもはや我々自らを理解しない。我々は經驗された、及び經驗されない總べての物に苦み悩む。我々は暴風雨の前に、赤裸々な岩石の間にあるかの如く感ずる。又鏗鏘の音や陰影を恐れる憐なる子供の魂の如く感ずる。この世界に爲される總べての邪惡事の四分の三までは、恐怖から起つてゐる。そしてこれは特に生理的作用である！

五三九

汝等は、汝等が何を意欲するかを知つてゐるか？——汝等は、眞實の何であるかを認知すべく、全

然資格がないかも知れないと云ふ恐れに悩まされたことはないか？ 汝等の感官があまりに鈍であり、汝等の視覚のディリカシイすらも尙ほ餘りに粗悪であるかも知れないと云ふ恐れに？ 若し汝等にして、如何なる意志が汝等の視覚の背後に支配してゐるかを認めたことならば！ 例へば、如何に汝等が昨日他人よりもより多く見ようと欲ひ、今日他人と異つて見ようと欲つたかよ！ 或は、如何に汝等が劈頭から、人々のこれまでに見出したと思つたところの物との一致を、もしくはその反対を見出さうと渴望したかよ！ おお、恥づべき熱望なるかな！ 汝等は如何に屢々強き効果を奏する物の方へ、如何に屢々鎮靜する物の方へ張目するかよ——汝等が恰かも疲勞してゐる故に！ 常に、眞實が何のやうなものであらねばならぬかの、内密の預決にみちて——汝等が、實にも汝等のそれを受取り得たことの爲め！ それとも汝等は、今日汝等が冬の晴れた朝のごとく凍結し乾燥してゐる故に、又何物も汝等の胸に横つてゐない故に、汝等により善き目があるやうに思ふのか？ 熱情や狂熱は、思想の産物を正しく扱ふべく必要でないか？ そしてこれこそ視覚と云はれるものなのだ！ あだかも人間を取扱ふのと何等か異つた仕方、思想上産物を取扱ひ得たかの如く！ 此交渉の中には同じ道德、同じ正直さ、同じ深意、同じ弛緩、同じ臆病がある——汝等の全體の、愛すべき、そして憎むべき自我が！ 汝等の肉體上疲弊が事物に淡い色を與へるとき、汝等の病熱はそれを怪物にするであらう！

汝等の朝は汝等の晩と異つて事物の上に照らないか？ 汝等は各の知識の洞穴の中に汝等自身の幽靈を再び見出すことを恐れないか？——眞實が依つて以て汝等の前に自らを包みかくしたところのズエルを？ それは、汝等が左様に思慮淺く演技に加はらうとするところの、一の恐ろしき喜劇ではないか？

五四〇

學習。——ミケランヂェロはラファエルの中に研究を見、自分自身の中に自然を見た。前者には學習を、後者には天分を見た。しかし乍らこれは一の街學にすぎない——この大なる街學者に對するすべての畏敬を以て言はれたところの。けだし天分は、學習や、經驗や、實習や、採用や、同化のより舊い一片のほかの何物であるか？——我々の祖先の階段もしくは更により夙いところまで遡つて！ 偕て又、學習するところの人は自分自身の天分を作る。ただ、學習するのは左様にたやすい事でない。そして唯だに善き意志だけで出来るものでない。我々は學習し得なければならぬ。ある藝術家にあつては、屢々嫉妬心がこれを妨害する。或は異種の感情によつて直に其刺を突つ立て、知らず識らず學習の代りに防禦の態度になつてしまふところの、あの自尊心が妨害する。あの自尊心はゲニテに缺け

てゐた如くラファエルにも缺けてゐた。それ故彼等は大きな學習者であつた。そしてただに、彼等の祖先等の漂石や歴史から洗はれたそれらの鑛脈の利用者であるに止まらない。ラファエルは彼の大きな競爭者が彼の『自然』と云つた物の同化の中に、學習者として我々の前から消え失せた。彼は毎日、その一片をもつて行つた——この最も高貴なる盜賊は。しかし乍ら彼は、ミケランヂェロ全體を自身の中へ運び込んでしまつた前に死んだ。そして彼の作品の最終の列は、一の新しき研究企畫の發端として、より少く完全であり善美である——かの大なる學習者が死によつて其最も厄介な仕事の中に邪魔され、彼の望見したるあの正當な最終の標的を、自分と一緒にもつて行つてしまつたからといふ、單にそれだけの理由で。

五四一

如何にして我々は化石すべきか。——徐々に、徐々に寶石の如く硬くなり、終に靜かに、永久の悦びにまで横る。

五四二

哲學者と老年。——夕方をして晝間を批判せしめるのは、決して賢いやり方でない。なぜと云つて、あまりに屢々其處に、倦怠が力や、成功や、善良なる意志の審判官になるからである。我々は又老年及び人生に對するその批判に關する事物にまで、最高の注意を拂はなければならぬ——特に、老年は夕方と同じく、一の新しきチャミングな道德に自らを包むことを好み、又夕紅や、薄明や、平和な若しくは憧憬的な靜けさによつて晝間を恥ぢしめることを知つてゐる故に。我々が老人に對して感ずる敬虔は、特に、それが思想家であり賢人である場合、たやすく彼の精神の老衰に對して我々を盲目にする。そして此の如き老衰や疲勞の徴候を其かくればから引き出すのは、即ち道德的の判断及び豫斷の背から生理的現象を引き出す——敬虔の痴人や認識の加害者にならぬ爲め——には、つねに必要な事である。けれど、老人が大なる道德的改革及び再生の狂想に囚はれるのは珍らしいことでない。この感情から彼は、彼の生涯の事業や進路に關する批判を表白する——恰も彼が今始めて洞察の目を得たかの如く。然し乍らこの幸福感情や、この自信ある批判の後には、鼓吹者として智慧でなく、むしろ疲勞が立つてゐる。その最も危険なる指標としては、恐らく天才信仰が擧げられるであらう。その天才信仰は大なる、半ば大なる理智者のこの時期に於てのみ起るのを常とする。除外例的地位及び除外例的權利に對する信仰である。天才に見舞はれたる思想家は、そのあとで事物をよりたやすく取ること、

又天才として、證明するよりも布告することを許されたやうに思ふ。しかし乍ら恐らくは、精神の倦怠が輕減に對して感ずるところの要求があ、の信仰の最も強い源泉であらう。それは宜しき時に於て、あの信仰に先き立つ——如何にそれが異つて見えやうとも。偕て此場合も、人々はすべての疲勞した人年老いたる人々の享樂欲に従つて、彼等の思考の成果を享樂しようと欲する——それを再び吟味したり播種したりすることの代りに。そして、それを好適なものに、その乾燥や、枯淡や、無味を取除くことを必要に感ずる。かくて老年の思想家は外觀上彼の生涯の事業の上に出るやうだけれど、實際には、それを、その中へ混じられた狂熱や、甘さや、風味や、詩人的な靄や、神秘的な光によつて悪くする。これぞプラトオの最後に起つた事であつた。峻嚴なる科學の拘束者征服者として、此世紀の獨逸人英吉人が如何なる比肩者をも出し得なかつたところの、あの大なる正直なる佛蘭西人、オオギュスト・コントの最後に起つた事であつた。次ぎには疲勞の第三の徴候。大なる思想家の若かつたとき、彼の胸を騒がしたところの、又其時分何物の中にも其満足を見出さなかつたところのあの功名心が、今年老いてゐる。彼はもはや失ふべき如何なる時をも有たない人の如く、満足により粗硬な、より大袈裟な手段を掴む。言ひ換へれば、活動的な、有力な、亂暴な、征服的な性情の人々の手段を掴む。此時以來彼は、もはや思想的構造物をでなく、彼の名を冠したる設備を企てよ

うとする。今や證據と辯駁との領域に於けるエエテル的な勝利や名譽は、彼にまで何であるか？ 書物の中の不朽は、ある讀者の魂の中の震ひわななく悦びは、彼にまで何であるか？ 一方では、かの設備は彼のよく知つてゐる如く、一の殿堂である。石造の、持ちのいい殿堂で、希らしきやさしき魂の犠牲（譯者註——このあたり、リヒアルト・ワグネルの事を言ふ）よりも、一層確實に其神様を生きた儘に保存する。恐らく彼は又此時分、人間よりも神様にあてはまるやうなあの愛を、初めて見出すであらう。そして、彼の本質全體がかくの如き太陽の光線の下に、秋の果物の如く軟くなり甘くなる。然り、彼は、大なる老人はより、神的になりより、美しくなる。それにも係はらず、彼が斯様にして成熟し、靜かになり、婦人の輝かしき偶像禮拜に休息することを許すのは、老年と疲勞とである。今や彼の従前の昂然たる、彼自身の自我をさへ超越したる願望は——純粹なる門弟子に對する、純粹なる思想實現者に對する、言ひ換へれば純粹なる敵手に對する願望は過ぎ去つてゐる。かの願望は弱められざる力から、いつでも彼自身の説の反對者たり、仇敵たり得ると云ふ意識的の誇りから來た。今や彼は決然たる黨與を、逡巡せざる伴侶を、救援團を、傳令を、華かな行列を意欲する。今彼はもはや、飛び進み飛び越える各の精神が生活するところの、恐ろしき隔離に堪へない。彼は今や、崇敬や協同や感動及び愛の對象を以て彼自らを取り卷く。彼は結局またそれを總ての宗教的な人々の扱ふ如く扱

ひ、彼の貴重するところの物を集團の中に齎^{おぼ}きまつらうとする。否彼は、ただ集團を有りたいばかりにも、宗教を案出するであらう。かくの如く賢き老人は生活する。そして、かくの如く生活するに依つて知らず識らず、僧侶的詩人的放逸への痛ましき近似に陥る。しかも其場合彼の賢き厳格な青年期や、彼の當時の峻烈な頭の道徳や、出來心や狂熱に對する彼の眞に男らしき嫌惡なぞが、辛うじて想起され得る位である。彼が従前自らを他の、より古き思想家等に比較したとき、それは彼等の力で以て嚴肅に自分の弱さを測り、自分自身に對してより冷靜に、又より自由になることの爲めだつた。然るに今はただ、比較によつて自分自身の狂想を酔はす爲めにみなされる。従前は彼は信任を置いて來るべき思想家等の事を考へた。然り彼は、彼自らが彼等のより圓滿なる光の中に没落するのを想見して悦んだ。今や、最終の人であり得ないことが彼を苦め悩ます。彼は彼が人々に遺^{おこ}す相續物と共に、自主的思想の制限をも彼等に強ひることの手段を考へる。彼は個々の精神の尊と自由欲とを恐怖し誹謗する。彼のあとには何人も最早其理智を全く自由に振り廻はしてはいけないのだ。彼自ら思考の激浪に打たるべき埠頭として永久に居残りたいと願ふ。これが彼の内密な、恐らくは必ずしも常に内密ならぬ欲望である！ ところで斯かる願望の底に横る厄介な事實は、彼自らが彼の教説の前に停足したといふこと、それに彼の境石を、彼の『ここまで、そしてこれから先きはいけない』を

置いたといふことである。彼は彼自らを聖列に加へながら、死の證據を自分の上に延べた。それからあと彼の精神はもはや發展し得ない。彼の時は去つてゐる。指針は止まつてゐる。一人の大なる思想家が自分を將來の人間に對する拘束的設備にしようとするとき、我々は彼が其力の頂點を越え、甚だ疲勞し、彼の日没に甚だ近く來てゐることを、確實に推定することが出来る。

五四三

欲情を眞實の論證にするな！——おお汝等人の善き、加之高貴なる狂熱家等よ、私は汝等を知つてゐる！ 汝等は正當であつたらと願ふ。我々の目にも、また汝等の目にも。しかし乍ら特に汝等の目に！ そして興奮し易き精緻なる良心の呵責は、左様に屢々汝等の狂熱に反對して汝等を刺衝し驅逐する！ 其時汝等が此良心の欺瞞及び催眠に於て如何に利巧になるかよ！ 如何に汝等が正直なもの、單純なもの、清潔なものを憎惡し、如何に汝等が彼等の邪念なき目を怨嫉するかよ！ 彼等を以て代表者とするところの、あのより善き知識は、汝等が汝等自らの内にあまり明瞭に聲を聞く（汝等の信仰を疑ふやうに）ところの、あのより善き知識は——如何に汝等はそれを、悪しき習慣として、時代の病患として、汝等自身の精神的健康の閑却及び感染として猜疑すべく試みるかよ！ 批評や、科

學や、理性に對する憎惡にまでもそれは汝等を驅り立てる！ 汝等は歴史をして汝等の爲めに證據立てしめるべく歴史を質造しなければならぬ。汝等は徳が汝等の偶像や理想を蔭に置かないことの爲め、徳を否定しなければならぬ！ 合理的論據が必要な處に、彩色された畫像が！ 表白の熱と力とが！ 銀の霧が！ アムプロオジアの香高き夜が！ 汝等は明るくしたり、暗くしたり、そして光を以て暗くしたりすることを知つてゐる！ そして實に、汝等の慾情が狂暴に陥るとき、その瞬間に於て汝等は汝等自らに言ふ、『今私は善き良心を私自らの爲めに得た。今私は高尚で、勇敢で、克己的で、宏量である。今私は正直である！』と。如何に汝等は、汝等の慾情が汝等自らの前で汝等に完全な無條件な權利を、そして謂はば無邪氣を興へるやうな、此等の瞬間を渴望するかよ！ 汝等が戦や、狂酔や、勇氣や、希望などに於て汝等自らの外へ出で、又すべての疑を超越してゐるやうな、此等の瞬間を渴望するかよ！ そして汝等が、『我々の如く自分自身の外に出られない人間は、何で、そして何處に眞實があるかを全く知り得ない！』と宣明するやうな、此等の瞬間を渴望するかよ！ 如何に汝等は、此情態——それは理智的墮落の情態である——に於て汝等と信仰を分つところの人間を見出し、彼等の松火で汝等の火を焚きつけることを渴望するかよ！ おお汝等の殉教に對して！ 神聖に語られたる虚言の汝等の勝利に對して！ 汝等は汝等自らに左様に多くの苦みを加へねばならぬか？ どうし

ても加へねばならぬか？

五四四

哲學が今如何様に行はれてゐるか。——私は十分に認めてゐる——我々の哲學を講ずる青年や、婦人や、藝術家などは今、希臘人が哲學から受取つたのと丁度反對の物を、哲學から要求してゐるといふことを。プラトオ式對話の各の説及び反説を貫く、あの持續的歡呼を聞かないやうな人間は、理性的思考の新しき發明に對する歡呼を聞かないやうな人間は、プラトオに對して何を、古代哲學に就いて何を理解するか？ あの時分魂は、概念や、概括や、辯駁や、引用などの嚴肅な遊戯をやりながら、陶酔を以て充された。恐らくは音樂の方で、それらの昔の大なる嚴肅なる調諧法の名手も知つてゐたであらうやうな陶酔に。あの時分希臘人等は、他のより古い従前全能であつた趣味をまだ存してゐた。それに對して新しい趣味が、甚だ多くの魅力を以て出現して來たので、辨證法の『神聖な藝術』は、戀愛の狂熱に於ての如く吃々として歌はれた。しかしながらあの古い方は道徳の範圍内の思考であつた。そしてそれに對しては、確定された批判、確定された事實のほかに何もなかつた。權威のほかなる何等の理由もなかつた。乃ち、思考は一の反復であつた。そして談話や會話のすべての享樂

は、形式の中に横はつてゐなければならなかつた。(内容が永久的普通的なものと見做されるところには、どこにでもただ一の大なる魅力がある。變化するところの形式、即ち時様の魅力がある。希臘人は詩人に於てすらも、ホメエルの時このかた、造形美術家に於てはより遅く、獨創を享樂しないで、むしろ其反對を享樂してゐた。ソクラテスは反對の魅力を、原因と結果との、論據と論結との魅力を發見したところのものだつた。そして我々近代の人間は、隨分論理の必要にまで習熟され養成されたので、それは我々の舌にまで正常な趣味と受取られ、又正常な趣味として、熱望的な人々や己惚おぼれの強い人々に嫌はれざるを得ない。苟くも思ひ切つて正常な趣味を超越したものならば、何でも彼等を狂喜させる。彼等のより手の込んだ功名心は、彼等をしてあまりにたやすく信じさせるかも知れない——彼等の魂が除外例であるといふこと、辨證法的及び理性的存在でなく、寧ろ(例へば)『直觀的存在』であり、『内面的感官』或は『精神的觀照』を賦與されてゐるといふことを。しかし乍ら彼等は特に、頭に守護神を體に鬼神をもつた、従つて此世界にも、來るべき世界にも特別の權利をもつた、就中、不可解であることの神の特權をもつた『藝術的資性』でありたいと願ふ。これが今哲學をやつてゐる！ 恐らくは、彼等は他日、彼等の誤つてゐたことに氣附くであらう。彼等の意欲してゐるものは、宗教なのである！

五四五

だが我々は汝等を信じない！——汝等は人間通として通用することを願ふ。けれども我々は汝等にそれを許さないであらう！ 我々は汝等が實際よりもより經驗のある、より深遠な、より感動した、より完全なものとして汝等自身を表現するのを、氣付き得てゐるではないか？ 同様によく我々はかの畫家に於て、如何に彼のブラシの運びの中に一の僭越が横つてゐるかを感得する。同様によく我々はかの音樂者に於て、彼が樂旨を演奏するときの仕方によつて、それを實際より以上の物に思はれしめようとするのを心附く。汝等は汝等自身の内に歴史を經驗したことがあるか——震撼を、地震を、廣く久しき悲みを、電光の如き幸福時を經驗したことがあるか？ 汝等は大なる及び小なる痴人と共に痴愚を演じたことがあるか？ 汝等は善良なる人間の狂想及び災禍を實際に引受けて見たことがあるか？ そして最も賤惡な人間の災禍及び特殊の幸福をも？ その時にこそ私に道德を説け。しからざれば説くな！

五四六

奴隷と理想主義者。——エピクテートの徒等は疑ひもなく、今理想を追うてゐる人々の趣味にまで合致しないであらう。彼の本質の不変なる緊張や、内部へ向けられた疲れを知らぬ眼光や、彼の目の控目なこと、細心なこと、告知しがたさや（それが外界へ向けられたとき）、又特に沈黙や簡潔な話や、最も峻厳な勇敢のすべての徴證——とり分け擴大を熱望してゐる我々の理想主義者等にとつて、それがそもそも何であつたらう？ それにも係はらず彼は、このストイックは狂信的でない。彼は我々の理想主義者等の誇示及び自負を忌み嫌ふ。彼の慢心は、それが如何に大きくとも、他人を擾さうと欲はない。彼は一定のおだやかな近接を許し、何人の善良な氣分をも悪くしようと願はない。否、彼は微笑することさへもある。甚だ多くの人情が此理想の中にある！ しかし乍ら最も美しいのは、彼が神に對する恐怖を全く脱却してゐること、彼が嚴密に理性を信じてゐること、彼が決して悔い改めを勧める説教家でないことである。エピクテートは一奴隷であつた。彼の理想的人間は何等の身分なしに、又すべての自分に於て可能であつた。しかし乍ら彼は、取り分け深い低い民衆の中に求めらるべきである——普遍的奉仕の中なる沈黙の、自分自身に満足したる人間として。外界に對して自分自身を守り、絶えず最高の勇敢の情態に生活してゐる人間として。基督教徒と彼の異なる點を云へば、何よりも先づ、基督教徒は希望の中に生きてゐる。『名狀すべからざる光榮』の慰藉の中に生きてゐる。彼は施

與される。そして最も善き物を、神聖な愛や恵みから期待したり受けたりして、自分自身から期待したり受けたりしない。これに對してエピクテートは希望しない。彼の最も善き物を施與されない。彼はそれを所有してゐる。彼は勇敢にそれを把握してゐる。彼は、それが彼から奪はれさうになるとき、全世界をも敵とするを厭はない。基督教は古代の奴隷の今一の種類の爲めに作られた。意志と理性との薄弱なもの、即ち奴隷の多數者の爲めに作られたのである。

五四七

精神の虐壓者等。——科學の進行は今やもはや、人が凡そ七十歳になるといふやうな偶然の事實によつて妨げられない——それが餘りに久しい間行はれてゐたやうに。従前人は此期間の内に認識の結末まで到着しようと欲つた。そして此普遍的な熱望に従つて認識の方法が評價されてゐた。小さな個の問題や實驗はつまらない物に思はれた。人々は最も短い道を取らうとした。彼等は思つた——世界の一切の物が人間の需要を目安にして配置されてゐるやうに見えた故、事物の認識法も人間の生命を目安にして配置された。一切の事物を一邊に、一の言葉で以て解決する——これが内密の願望であつた。ゴルディウスの結繩（譯者註——これを解きたるものは、亞細亞に君臨するだらうと云ふ託宣

があつたが、何人もそれを解き得なかつた。アレキサンデル王これを知り、剣をぬいて立處に断ちきつたといふ傳説の象徴の下に、或はコロンバスの卵の象徴の下に、人々はあの仕事を考へた。人々は疑はなかつた——認識に於ても、アレキサンデル或はコロンバスのやつたやうな仕方では標的へ到達し、すべての問題を一の答で片付けてしまふのが、可能の事であると云ふことを。一の謎が解かれねばならぬ。『哲學者の目にはこれが人生の目的と見えた。第一に必要なものが、此謎の何であるかを見出し、世界の問題を最も單純な謎的方式の中に押し込むことであつた。』世界の解謎者』であるといふ際限なき功名心と悦びとが、思想家の夢にはひつてゐた。一切を彼の爲めに解決すべき手段でなかつたとき、何物も彼にまで努力を値してゐると思へなかつた！ かくて哲學は精神を虐壓する爲めの最高の奮闘のやうなものに成つた。そして何人も疑はなかつた——斯様な物が、ある非常に幸福な、精緻な、獨創的な、大膽な、力強き者(たつた一人の者!)の爲めに保存されてゐたと云ふことを。そして多くの人々が、最終にはシ・オ・ベン・ハウエルが、この唯一人者であるやうに思つた。この結果として、一體に學問はこれまで其學徒の道德的狹量によつて退歩的情態にゐた。そして、それは今後一のより高き、より宏量なる根本感情を以て修められねばならぬ。『私なんぞ何だ！』と、未來の思想家の門戸の上に書かれてゐる。

五四八

力に對する勝利。——これまで『超人的精神』として、『天才』として尊敬されてゐたすべての物を考へて見れば、我々は次ぎの悲しき結論に到着する。曰く、一體に人體の理智性は甚だ低常な、みじめなものであらねばならなかつた。そのすつと上に出て自らを感すべく、これまで極めて僅かな性質だけしか必要でなかつた！ 嗚呼、『天才』の安價なる聲譽の爲めに！ 如何に速に其玉座が建てられ、其禮拜が慣習にまで成つたかよ！ 今尙ほ我々は力の前に跪く——昔の奴隸の習慣に従つて——しかも尙ほ、尊敬を値する程度が決定されねばならぬ時、ただ力に於ける理性の程度だけが決定的要素である。我々は如何なる程度まで力が、より高き或る物によつて克服され、今や其道具や手段として奉仕してゐるかを知測しなければならぬ！ しかし乍らかくの如き知測に對しては目が餘りに僅かすぎる。然り、大抵の場合天才の知測が一の演習と見做される。かくて恐らくは最も美しいものが矢張り暗闇の中に起り、やつと起つたかと思つてゐる中に永久の夜へ消え失せてしまふ。私は、ある天才が作品の上でなく、むしろ作品としての自分自身の上に、言ひ換へれば彼自身の克己の上に、彼の想像の醇化の上に、インスピレーションや落想の配列選擇の上に用ひるところの、あの力の見物を謂ふの

である。大なる人物は矢張、尊敬を要求するところの大なる物の中に、一の餘りに遙かなる星の如く見えないでゐる。力に對する彼の勝利は矢張目撃なしでゐる。従つて歌も歌手もなしでゐる。人類のすべての過去の歴史に於ける大なる人物の等級は、矢張りまだ決定されないでゐる。

五四九

『自我からの逃避』——バイロンや、アルフレッド・ド・ミッセエの如く、自分自身に對して苛立たしく陰鬱になるところの、又彼等の爲す一切の物に於て奔馬に似てゐるところの、更に又彼等自身の制作からただ一の短い、血管をも殆んど張り裂くやうな悦樂及び情熱を、そのあとに一の愈々嚴冬のな荒涼と悲愁とをのみ引き出すところの、理智的痙攣のそれらの人々は、如何にして彼等は自ら堪へ得べきぞ！ 彼等は『自己を超越した』ある物へ到達することを渴望する。かくの如き渴望をもつた我々が基督教徒であるならば、我々は神への到達を、『全然彼と一になる』ことを志すであらう。我々がシェキスピアであるならば、我々は最も熱情的な生活の畫像の中へはひつて満足するであらう。我々がバイロンであるならば、我々は行動を渴望するであらう。なぜならば行動は、思想や感情や制作よりも、更により多く我々を我々自身から引きはなしてくれるからである。かくの如く、行動の欲望も恐らく

實際には自我からの逃避であつたらうか？ かくパスアルが我々に問ひたづぬるであらう。そして全くだ！ 此斷言は、行動の欲望の最高の代表者等によつて證明されたかも知れない。此點に關しては精神病醫の知識と經驗とに聽いて見るがよい。曰く、あらゆる時代の最も行動を渴望してゐた人々の四人は——即ちアレキサンデルや、シイザアや、マホメットや、ナポレオンは癲癇患者であつたと。尙ほバイロンも同じ病氣をもつてゐたといふのである。

五五〇

認識と美。——もし人々が、彼等の矢張り爲しつゝある如く、空想や假裝の制作の爲めに、彼等の尊敬や幸福感情を保存してゐるならば、彼等が空想や假裝の反對物を冷く不愉快に見出すとき、驚くを要しないことであらう。洞察の最も小さな、確實な、決然たる歩調や進歩に際してすらも起るところの、そして今日の如き學問から、左様におびただしく且左様に多くの人に迄流れ出るところの狂喜は、この狂喜は一時の間、常にただ現實の棄却に際し、假象の深みへの跳び込みに對してのみ、狂喜するに對してのみ、狂喜するに馴れたる總ての人々から信じられない。それ等の人々は、現實が醜いものであると思つてゐる。しかし乍ら彼等は、最も醜い現實の認識すらも美しいものであると云ふこと、

並びに、しばしば多くを認識する人が結局、現實——その發見が彼にいつも幸福を與へた——のなる全體を醜く思ふことからずつと遠くなると云ふことを考へないのである。抑々『本來美しき』何物かがあるか？ 認識するものの幸福は世界の美を増し加へる。そして存在するところの總てのものをより朗かにする。認識はその美を、ただに事務のまはりに置く丈けでなく、尙ほ長い間には事物の中に置く。將來の人類はこの命題に對して證據を擧げよかし！ ところで、我々をして一の古き經驗を思ひ起さしめよ。プラトオとアリストオテレスとの如くあんなにも甚だしく異つた二人の人間が、ただに彼等に對し或は人々に對してのみならず、また本來の、即ち最終の祝福を持つた神々に對しても、最高の幸福を構成するところのものに關しては説を同うしてゐる。彼等はそれを認識のうちに見出した。十分に實習されたる發見的並びに發明的悟性の活動のうちに見出した（獨逸の半神學者や全神學者の如く『直觀』の中にでなく、神祕家の如く幻覺の中にでなく、そしてまたすべての實際家の如く制作の中にでなく）。デカルトやスピノオザも同じ様に批判した。如何に彼等すべてが認識を享樂せねばならなかつたよ！ そして、それによつて事物の頌徳家になるべく、彼等の正直に對して如何なる危険がありしよ！

五五一

將來の徳に就いて。——世界がもの分りよくなればなる程、いよいよあらゆる種類の儀式が減じて來たといふのはどうしたことか？ 抑々恐怖はそんなにまで、すべての知られざるもの神祕的なもの前で我々を襲ひ、我々をして不可解なものの前に跪きあはれみを乞はしむるところの、あの畏敬であつたと云ふのか？ そして我々がより少く臆病になつたことによつて、世界は我々に對して持つてゐたところの魅力をも失はねばならなかつたか？ 我々の臆病と共に、我々自身の品位や威嚴も、我々自身の恐ろしさもより少くなつたと云ふことはあり得ないか？ 恐らく我々は、我々が彼等と我々自身とに就いてより大膽に考へ出して以來、世界と我々自身とをより少く眼中に置くであらうか？ 恐らく將來に於て思考のかうした勇氣が最高の慢心として人間及び事物の上に自を感ずる程、それ程成長してしまふやうな時が來るであらうか？ 賢き人が最も勇敢な人間として、自分自身及び存在を自分自身の下に最も低く見るやうな時が來るであらうか？ 過度な宏量から遠くないところの勇氣のかうした種類は、これ迄人間性を缺いてゐた。おお、詩人は曾つてあるべかりしものに再びなり度いと願つた——我々にあり得べきことの何物かを語るところの透視者に！ 今や現實的なもの及び過ぎ

去つたものが愈々彼等の手から取られる。そして取られねばならぬ。何故と云つて毒の無い贗造の時代はお仕舞になつてゐるから！ 彼等は我々をして將來の徳の何物かを豫感せしめようと願つた！ 或は世界のどこかにあり得るとも、決して地上に見出されないやうな徳の何物かを！ 美しくきもの深紅に燃える星座や銀河全體の何物かを！ 汝等理想の天文家等よ、汝等はどこにゐるか？

五五二

理想的我欲。——抑々懷妊より神聖なる状態があるか？ 我々のなすところのすべてを、無言の信念に於てなすのは！——それが兎に角我々の内に出来上りつつあるものの爲めに違ひないと云ふ！ またそれが考へて見ただけでも我々を狂喜させるやうな、その神祕的な價值を高めるに違ひないと云ふ！ かかるとき我々は厳しく自らに強ゆるに及ばずして、多くのものを抑制することが出来る！ かかる時我々は厳しき言葉を差し控へる。我々は宥恕の心を持つて手を差し延べる。最も柔和なもの及び最も善良なものから、子供が生れて來なければならぬから。我々是我々の峻しさとあわただしさを避ける——それらのものが知られざる最愛者の生命の様に、一滴の災をでも注ぎ込むであらうならば。一切のものが要心深く蔽ひ隠されてゐる。我々は何が爲されつつあるかに就いて何物をも知ら

ない。我々は準備されるのを待ち且つ求めてゐる。この場合我々の中には、深い責任無さの純潔な、純潔にするところの感情が支配する——殆んど引かれた幕の前に見物の持つやうな感情が。それが成長する。それが明るみへ出て來る。我々はその價值をもその時をも決定すべき何物をも手にしてゐない。我々は一に、各々の間接な、祝福して呉れる、防衛して呉れる勢力へ向はせられてゐる。『此所に成長しつつあるのは、我々より大なるものである。』これが我々の最も内密な希望である。我々はそれが都合よく世の中へ出て來ることの爲めにあらゆるものを整へておく——ただにすべての有用なものばかりでなく我々の魂の誠實と高貴とをも。かくの如き靈感の中に我々は生きなければならぬ！ 我々は生きることが出来る！ そしてこの期待されたものが一の思想であらうとも、一の行爲であらうとも、我々はすべての本質的な遂行にまで、懷妊のそれより他の如何なる關係をも有しない。そして『意欲』や『創造』に關する高慢なる文句を風に吹き散してしまはねばならなかつた！ ほんとうの理想的我欲は、いつも氣を配つて、魂を鎮めておいて、我々の多産性が美しく結末するやうにすることである。かくの如くかうした間接な仕方にて、我々はすべてのものの利益の爲めに心を用ひるのである。そして我々の生活を取り巻く氣分は、此の尊大にして柔和なる氣分は油のやうなもので、落ち着きの無い魂の上に我々の周圍へ遠く擴がるのである。しかし乍ら懷妊者は妙なところを持

つてゐる！ されば我々をして同じく妙なところを持つた人間であらしめよ。そして他人が妙な人間であらねばならぬとき、それを非難せしめるな！ そしてこれが邪悪なもの危険なものになつて來る場合にすらも、我々はこの出來上りつつあるものに對する畏敬の念に於て、一般の正義におくれを取つてはならぬ——司法官や絞刑吏が懷妊した婦人に手を觸れることを許さないところの、あの世俗一般の正義に！

五五三

⑤ 迂路。——此の哲學全體はそのすべての迂路を以てしていづこへ行かうとするのか？ それは一の普遍的な力強い衝動を、謂はば理性に翻譯するよりより多くのことをなすか？——溫和な太陽や、朗らかな爽やかな空氣や南國の植物や、海の美風や、肉と卵と果物との手輕な食事や、熱い飲水や、幾日にも亘つての靜かな散歩や少し許りの談話や、たまの要心深い讀書や、孤獨な住居や、清潔な質素な殆んど軍人的な習慣などに對する衝動、言ひ換へれば、最も私の趣味に適つた、最も私の爲めになるすべての事物に對する衝動を。所詮一の箇人的な割當てに對する本能であるところの哲學なのか？ 私の空氣や、私の高さや、私の天候や、私の健康などを、私の頭の迂路に依つて求めるところの本能的な

のか？ そこには他の多くの、そしてより高き多くの哲學がある。そしてただに私のよりより暗鬱な僭越なもの丈けでない。思ふにそれ等ものは總體として、同様に箇人的な衝動の理知的な迂路に他ならないのであらうか？ その間に私は、新らしき目を以つて一つの蝶の内密な孤獨な飛翔を見る——多くのよき植物が生えて居る、湖水の岩多き岸邊に高く、蝶はあちらこちらと飛びまはる。そして彼がただ一日の生命を餘して居ると云ふこと、夜が彼の脆い翼に取つてあまり冷た過ぎるだらうと云ふことなど、聊も心附かないでゐる。恐らく彼にとつても一の哲學が見出されるであらう——たとひそれが私の哲學でなからうとも。

五五四

⑥ 先行。——我々が進行を賞讃するとき、我々はただ運動と、そして我々に同じ場所に止まらせないところのそれらのものをのみ賞讃する。そしてこれが事情によつては勿論有意義なことである——とり分け我々が埃及人共の間に生活してゐる場合には。しかし乍ら運動が所謂「當り前のこと」として理解される『運動性の歐羅巴に於ては（嗚呼、我々がせめてそれに就いての何物かを理解して居たならば！）、私は先行を賞讃する。そして先行者即ち、いつも自分自身を取り残して置き、誰れかが付き従つて來

るかどうかを全然考へないやうな人々を賞讃する。『私が立ち止るところに、そこに私は私一人を見出す。何の爲めに私は立ち止らねばならぬか！ 沙漠はまだ広い！』かやうなる先行者はかくの如く感ずるのである。

五五五

最もつまらないものでも十分である。——我々は事件の最もつまらないものも十分強く我々に印象されることを知るとき、それ等の事件を避けなければならぬ。しかも我々はこれを避け得ない。思想家は苟くも彼の尙ほ経験しようと思ふところの、あらゆる事物のおほよその規矩を自分自身の中に持つてゐなければならぬ。

五五六

四箇の善。——我々自身及び我々に親しきすべてのものに對して正直であること。敵に對して勇敢であること。打ちまかされたもの共に對して寛大であること。いつでも慇懃であること。この四箇の根本的なる徳はかくあるべきことを我々に要求する。

五五七

敵を目掛けて。——我々が敵を目掛けて行進するとき、悪しき音楽も悪しき理由も如何によく響くかな！

五五八

だがその人間の徳を匿すな！——私は透明な水のやうな、またボオブの言葉をかりて云へば、『流の底に不潔を見えしめる』やうな人間を愛する。だが彼等にも尙ほ虚榮心がある——勿論より氣體化した種類のものだが。彼等の或者は、我々がただ不潔をのみ見るやうに、そしてその事を可能にするところの水の透明を心に留めないやうにと希望する。ゴオタマ・ブダより他の人も、この少数者の虚榮心を、『汝等の罪惡をして人々の前に見えしめ、汝等の徳を包み匿せよ！』と云ふ方式の中に洞見したしかし乍らこれは世界に何等のよき見物を具備させない。それはよき趣味に對する罪惡である。

五五九

『何物も甚だしきに過ぎない！』——如何にしばしば箇々の人間に、彼の到達し得ない、彼の力を超越したる標的を置くことが推奨されるかよ！——少くとも、彼の力が最高の緊張によつて成し就げ得るところのものへ到達することの爲め。しかし乍らこれは實際左様に願はしきことであるか？この説に従つて生活するところの最もよき人々、並びに彼等の最もよき行動は、彼等に餘りに多くの緊張がある故に、必然何等かの誇張された、捻ぢ曲げられた外貌を取らないであらうか？そして不成功の灰色の光が世界一杯に擴がらないであらうか？——我々が到る處に闘技者や大袈裟な身振を見、いづこにも桂冠を戴いた勝利者を見ないと云ふ事實に依つて。

五六〇

何を我々が自由になし得るか。——我々は堰堤の如く我々の衝動を處理することが出来る。そして少數の人の知つてゐることだが、怒りや、同情や、沈思や、虛榮心の芽生えを、樹壻の美しき果物の如く、左様に多産的な重寶なものに養ひ育てることが出来る。我々は堰堤のよき悪しき趣味に従つて、謂はば佛蘭西風に、或は英吉利風に、或は和蘭陀風に、或は支那風にそれをなすことが出来る。我々は自然をしてその進路を取らしめることが出来る。そしてただ折々僅かばかりの修飾と掃除とをのみ心

掛ける。我々は結局何等の知識も思慮も無しに、かの植物をして自然の好都合及び不都合の中に伸び、それ等のもの自身の間に奮闘し盡さしめることが出来る。然し我々は斯様な亂暴の中に我々の喜びを取ることが出来る。そしてかうした喜びをこそ取らうとする——それには随分困難を伴ふこともあるのだけれど。かうしたすべてのことは我々に自由である。しかし乍らこれが我々に自由であることを、如何に多くの者共が知つてゐるか？大抵の人々は完全な成長し切つた事實までを信する如く自分自身を信じないか？大なる哲學者等は性格不變の説を以て、この先入權に封印をしなかつたか？

五六一

我々の幸福をして輝かしめる。——畫家は現實の天の深い輝く色調を到底再現し得ない。そして彼等がその風景に要するところのすべての色を、自然が示すより二三段より低く用ゆる可く餘儀なくされる。丁度彼等がかうした細工に依つて、自然そのものの色調の華やかさや調和に再び接近し得る如く、詩人や哲學者も亦幸福の輝かしき光が到達し得難いものであるとき、一のやりくりをすること知らなければならぬ。彼等がすべての事物を實際より數段より暗く色どるとき、彼等の心得て居るその光は、殆んど太陽の如く、そして本當の幸福の光に似て働くであらう。最も黒き、最も暗鬱な色

彩をすべての事物に與ふるところの悲觀家は、ただ火焰と、電光と、天上的な榮光と、そしてきらきらと鋭く輝き人目を幻惑させるやうなすべてのものをのみ用ゆる。彼にとつては光はただ、恐怖を加へる爲めに、そして事物の中に實際以上の恐ろしきものを豫感させる爲めにのみ存在するのである。

五六二

住所の定まれるものと定まらぬものと。——ただ幽界に於てのみ我々は、オディッソイス等の周圍に永久の海光の如く横はるところの、あのすべての冒險的祝福の暗鬱なる背景を瞥見する。我々が最早忘れることの出来ないあの背景を瞥見する——オディッソイスの母が彼女の子供に對する悲痛と願望との爲めに死んだと云ふやうな！ 一方は甲の場所から乙の場所へと追ひ遣られる。他方は、住所の定まれるもの優しきものは、その爲めに胸を破られる。これは常にあることである！ 悲しみは、最も愛してゐるものがそのもの意見やそのもの信仰を捨てるのを見せつけられるところの、それらの人の胸を破る。それは住所の定まらぬ精神が作るところの悲劇である。それを彼等自らが折々覺る！ そのとき彼等も恐らくオディッソイスの如く、彼等の苦惱を和らげ、彼等の感動し易さを軽くする爲めに死人の間へ下つて行かなければならぬであらう。

五六三

世界に道德的秩序ありと思ふ謬想。——各々の罪過が贖はれ拂はれることを要求するやうな、如何なる『永久の正義』もあるものではない。左様なものがあると思ふのは、一の恐ろしき、ただある範圍内のみ有用な謬想であつた。それは恰も、罪過として感じられる一切のものが罪過であると云ふのが、一の謬想であるやうなものだ。事物では無く、むしろ全く存在せざる事物に就いての意見である——そんなにも人間を思ひ煩はしたのは！

五六四

經驗の直ぐ側では！——偉大なる精神もただその片手の巾丈はばの經驗を持つてゐる。その直ぐ側では彼等の反省が止まる。そして彼等の果てしなき空虚と彼等の愚鈍とが始まるのである。

五六五

品位と無智との結合。——我々の理解するところには、我々は愛すべく、幸福に、獨創的になる。

そして我々が十分に學び、我々の目や耳をこさへ上げた所には、我々の魂はどこにでもより多くのしなやかさと嬌致とを示す。しかし乍ら我々は左様に僅かに理解し、左様に見すばらしく教訓されてゐる。そして左様に稀に、我々が一の事物を抱擁し、それと同時に我々自らを愛すべきものにする。むしろ我々はしやちこばつて、無感覺に都市や、自然や、歴史を通り抜ける。そして恰も卓越の結果でもあつたかのやうに、かうした冷淡さの中に幾分の誇りを感じる。然り、我々の無智と我々の貧弱なる知識欲とは、品位と正確とを装はうことをうまく心得てゐる。

五六六

安價に生活する。——最も安價な最も罪の無い生活の仕方は、思想家のそれである。何故と云つて取り敢へず最も重要な點を云へば、彼は丁度他人が輕視し放棄するところのものを最も必要に感ずる。次に、彼は容易く自らを喜ばせ、何等の高價なる悅樂手段を知らない。彼の仕事は困難でなく、むしろ所謂南國的である。彼の晝と彼の夜とは良心の呵責に依つて汚されない。彼は彼の精神が愈々穩に、愈々力強く、愈々朗かになるやうにとて、運動したり、飲食したり、睡眠したりする。彼はその肉體の享樂をする。そしてそれを恐れる可き何等の理由を有しない。彼は社交を要しない——折々、その

後で一層熱烈に彼の孤獨へ引き返す爲めになかつたなら。彼は生存者に對する償ひを死人の中に持つてゐる。そして友人に對してすらも償ひを持つてゐる。即ち會つて生きてゐた最もよきものの中に。人間の生治を高價にし、従つて困難にし、また屢々耐へ難きものにするのが、反對の欲望や習慣でなかつたかどうかを考へて見よ。もとより他の意味に於て、思想家の生活は最も高價なものである。彼にとつては何物も善過ぎてゐない。そして最もよきものを無しに仕舞ふのは、彼にまで一の耐へ難き我慢であつたであらう。

五六七

戰場にて。——『我々は事物を、それが値してゐるよりもより快活に取らなければならぬ。とり分け我々はそれを久しい間、それが値して居るよりもより嚴肅に取つてゐた故に。』認識の勇敢なる武人等は斯くの如く言ふ。

五六八

詩人と鳥。——フェニックス鳥は詩人に、一の燃えてゐるところの燃え盡さるところの役割を示し

た。『恐れるな！』と鳥が云つた。『それは汝の仕事である！ それは時代の精神を持つてゐない。そして更により少く、時代に反対な人々の精神を持つてゐる。さればそれは焼き盡されなければならぬ。けれ共それは好個の標徴である。そこには様々な種類の黎明がある。』

五六九

孤獨なる人々に。——若し我々が我々の獨語に於て、公の場合に於けると同様他の人々の名譽を愛惜しないならば、則ち我々は無作法な人間である。

五七〇

損失。——或る種類の損失から授けられた壯美の中では、魂が悲歎を休め、高い黒いこぶらすの下を行く如く黙つて行くのである。

五七一

魂の野戰藥局。——何が最も有効な藥劑であるか——勝利。

五七二

生活が我々を落ち着かせなければならぬ。——若し我々が思想家の如く、通例思想や感情の大なる流れの中に生活し、我々の夜の夢すらもこの流れを追ふならば、我々は生活から落着きと静けさを期待する。けれ共他のものは、瞑想に没頭して仕舞ふとき生活から抜け出して休息しようと願ふ。

五七三

皮を脱ぐ。——皮を脱ぎ得ない蛇は亡びる。その意見を變更することを妨げられるところの精神も同様である。彼等は精神であることを休めてしまふ。

五七四

忘れないやうに！——我々が高く昇れば昇る程、飛ぶことの出来ない人々にまで、我々は愈々小さく見えて来る。

五七五

我等精神の航空家。——遠く、愈々遠く飛んでゐるすべてのそれらの大膽なる鳥も、屹度！ 其儘どつかで最早や飛び進むことが出来なくなるであらう。そして或るマストだとかつまらない絶壁だとかの上に止まるであらう——然もこの哀れなる休息所を左様に有難く思つて！ 然し乍らそれから、彼等の前に如何なるより大なる自由な進路も残つてゐないと云ふこと、彼等の飛び得る丈けそれ丈け遠く飛んだのであると云ふことを、誰が論結し得るか？ すべての我々の大なる教師や嚮導者は結局立ち止つてゐる。そして彼等の倦怠が立ち止まらせたのは最も高貴なる、最も優美なる態度に於てでない。それは私にも汝にも起ることであらう！ しかし乍らそれが私や汝にとつて何であらう！ 他の鳥がその先を飛ぶであらう！ この我々の洞察と進行とは、彼等と競争し乍ら遠く高く飛ぶ。彼等は我々の頭や我々の無力の眞上を空高く上り、そこから遠方を見る。我々よりずつとより強い鳥の群を見る。その群は我々の行かうとしたところ、そして一切が海であり、また海であり、海の他の何物でもないところへ行かうとするであらう！ さて我々はどこへ行かうと願つてゐるか？ 我々は海を越えて行かうと願つてゐるか？ この力強き欲情は、我々にまで快樂以上のものを値してゐるこの欲

情は、どこへ我々をひつさらつて行くか？ だが、何故に丁度此の方角へ、これ迄人間性のすべての太陽が没してゐるやうな方へ我々は飛ぶのか？ ことに依つたら人々が、他日我々に就いて云ふであらうか？——我々も西の方へ舵を向けながら、一の印度へ達することを希望したのだと——だが、我々の運命は無限の上に乗上げて破船するにあつたのだと！ それとも我が兄弟等よ？ それとも——？



大正七年四月五日印刷
大正七年四月十六日發行

(定價金壹圓六拾錢)

◀明 黎▶

著 者

生 田 長 江

發 行 者

佐 藤 義 亮

發 行 所

東京市牛込區矢來町中の丸

新 潮 社

電話番町(長)八〇九九番
總發東京壹七四貳番

印 刷 所

東京市神田區宮下町五番地
電話下谷四〇六七番

新 潮 社 印 刷 部

(印刷者)

高 橋 治 一

■ニイチエ全集目次

第一編 人間的りな餘人間的りな餘 (前編) 再版

第二編 人間的りな餘人間的りな餘 (後編) 既刊

第三編 黎 明 (全一册) 新刊

第四編 悦ばしき知識 (全一册) 近刊

275
3

終